

マレーシア・インドネシア経済視察団報告書

令和元年11月24日(日)～30日(土)



令和2年3月



広島経済同友会

国際委員会

視察写真集

～ マレーシア ～



オタフクソースマレーシア視察風景



在マレーシア日本国大使館員によるレクチャー



クアラルンプールでの夕食のひとコマ



ジマイーストパワー視察風景



ペトロナス・ツインタワー スカイブリッジにて

目 次

• はじめに	団長 佐々木茂喜	1
• マレーシア・インドネシア経済視察団名簿		3
• マレーシア・インドネシア経済視察団日程		4
• 【所感】 マレーシア・インドネシア経済視察に参加して	副団長 田村 興造	5

《視 察》

【マレーシア】

オタフクソースマレーシア	堂本 高義	7
ジマイーストパワー	榎本 暢之	9
ペトロナス・ツインタワー	古川 浩延	10

【インドネシア】

インドネシア商工会議所	高原 哲也	11
カラワン工業団地	野口 隆志	13
プルタミナ（インドネシア国営石油会社）	渡邊 智幸	14

《表 敬 訪 問》

在マレーシア日本国大使公邸	榎田 勇樹	17
在インドネシア日本国大使公邸	藤田 洋一	18
ジャカルタジャパンクラブとの交流	古本 竜一	19

《所 感》

ブキッ・ビンタン地区	狩野 牧人	20
もう一度行きたい国、マレーシア	小林 通匡	21
バトゥ洞窟と宗教について	山本 美香	23
マレーシアの食について	篠原 幸一	24
地元の人々の生活、文化、街並みなど	田村 満則	26
マレーシアの視察を振り返って	吉田 豊	27
マレーシア 新興国から更なる高みへ	藤井 伸一	29
パサール・バル	奥原 祥司	30
インドネシア料理について	船木 孝哲	31
インドネシアの交通事情	磯部 順司	33
インドネシア雑感	垣見 直樹	35
インドネシアの「首都移転」	三山 秀昭	37
インドネシアの視察を振り返って	加藤 雅規	38
マレーシア・インドネシア経済視察 雑感	佐藤 卓己	40
マレーシア、インドネシアにおけるイスラム教の感想	丸川 眞佳	41
イスラム文化圏で感じたこと	山根 近	43
視察を通じて見えてきた日本と両国の関係	大内 康隆	45

• おわりに	副団長 山本慶一郎	46
--------------	-----------------	----

は じ め に

広島経済同友会

マレーシア・インドネシア経済視察団

団長 佐々木 茂 喜

(オタフクホールディングス㈱ 代表取締役社長)

当会では、令和元年11月24日（日）から30日（土）の7日間にわたり、マレーシア・インドネシアに経済視察団を派遣いたしました。

本視察は、マレーシアにて広島から進出している2つの企業を訪問することにより、ハラル関連の動向と電力関連支援に対する諸活動、またインドネシアでは工業団地や公共交通含むインフラの状況や、商工会議所との情報交換による現状などを把握し、当会の活動テーマである「広島の才能を眠らせない」に資することを目的として実施しました。

最初の訪問地、マレーシアの首都クアラルンプールでは、近代的な街並みの象徴としてそびえるペトロナス・ツインタワー、綺麗に手入れされた車や緑地帯等から、民度の高さが推し測られました。多民族、多宗教、多言語という国にもかかわらず、この整然とした国柄は、何に由来しているのか？逆に植民地時代が長かったという歴史的経緯から、独自の歴史形成の機運を持てなかったことにより、多種多様な人々を受け入れる素地が、出来上がったのかもしれませんが。またマレーシアには、さまざまな伝統的思想やイデオロギーが少ないように感じられましたが、結果、社会はより開放的になったようです。その代り、芸術や美術が未発達なのか、マレーシアには著名な美術館や博物館が全く見当たりませんでした。さらに観光地や名勝地といった類もなく、今回の視察工程にも全く反映されませんでした。それ故か、数多くの国を訪問しているであろう当団員の多くが、初のマレーシア訪問となりました。

次に訪問したインドネシアは、人口が世界第4位、平均年齢30歳、地下資源も豊富で、数値だけを見ると将来性は明るいように思われます。GDPの長期予測では、2030年にはインドが第3位、2040年には日本を抜いてインドネシアが4位になるといわれています。ただ工業団地や大使公邸を訪問する際の、インフラ整備や交通渋滞は地球上で最悪と思わされました。何年も前に中断になったモノレール工事の橋脚が、そのまま残って通行障害になったり、増えすぎた車をナンバーに合わせた奇数偶数日で制限したりと、その場しのぎの対症療法がやたらと目につきました。政府系の大手企業を訪れた際、経営幹部に「2040年GDP4位の可能性は？」と質問した際の答えは「来年の事には答えられるが、その先はわからない」でした。この国にはまさに公共のインフラ整備も緊急の課題ですが、それ以上に国民が共有できる「ビジョン」とそれを実行する「ガバナンス」が最も必要ではないかと感じざるを得ません。

各々の視察先や交流会などの詳しい状況は、各団員の報告をご覧くださいこととして、団員の皆様のご協力により、無事に視察を終えることができ、感謝しております。また本年開催の東京オリンピック・パラリンピックを控え、世界から益々注目を集めるわが国を、客観的に認識することが出来た視察でしたので、今後の同友会活動にも大いに反映されることと期待しております。

結びにあたりまして、ご参加いただいた団員各位、視察先の手配などお世話をいただいた国際委員会の皆様及び関係者の方々に対し心より感謝申し上げます。

マレーシア・インドネシア経済視察団 名簿

(長 寸)

佐々木 茂 喜 オタフクホールディングス(株) 代表取締役社長

(副団長)

田 村 興 造 広島ガス(株) 代表取締役会長

山 本 慶一朗 (株)中国新聞社 社主兼取締役

(員 寸)

磯部 順司 (有)ライブワーク 代表取締役

榎 本 暢 之 (有)エノモト 代表取締役

大 内 康 隆 オタフクホールディングス(株) 執行役員広報部部長

奥 原 祥 司 コトブキ技研工業(株) 代表取締役社長

垣 見 直 樹 (株)コントレール 代表取締役

加藤雅規 (株)加藤組 取締役副社長

狩 野 牧 人 (有)トッツ 代表取締役

小林 通 匡 ニッキフックー(株) 代表取締役社長

佐藤卓己 (株)サンエス 代表取締役社長

篠原 幸一 ツネイシカムテックス(株) 代表取締役会長

高 原 哲 也 丸紅(株)中国支社 支社長

田村 満 則 ヒロコンフーズ(株) 代表取締役社長

堂 本 高 義 堂本食品(株) 代表取締役

野 口 隆 志 (株)ノサックス 常務取締役

藤 井 伸 一 三井物産(株)中国支社 支社長

藤田 洋一 伊藤忠商事(株)中四国支社 支社長

船 木 孝 哲 広島ガス(株) 執行役員総務部長

古川 浩延 ゲイソー・ロジスティクス(株) 代表取締役社長

古 本 竜 一 (株)古本建築設計 代表取締役

丸川眞佳 (株)アートテレビ 代表取締役

三 山 秀 昭 広島テレビ放送株 最高顧問

山 根 近 久福汽船(株) 代表取締役

山 本 美 香 新庄みそ(株) 代表取締役社長

吉 田 豊 白井汽船(株) 代表取締役社長

渡 邊 智 幸 三菱商事(株)中国支社 エネルギーソリューション事業グループ
グループマネージャー

栗田勇樹 (株)中国新聞社 經濟部記者

谷 口 康 雄 広島経済同友会 事務局長

■ 日 程 表 ■

日数	月日・曜日	都 市	時間	便名	行 程
1	11月24日 日曜日	広島駅 発 博多駅 着 福岡空港 発 シンガポール空港 着 シンガポール空港 発 クアラルンプール空港 着 空港 発 クアラルンプール	6:05 7:33 9:45 15:30 18:40 19:40 20:30 夜	こだま821 SQ655 SQ118 専用バス	新幹線で博多駅へ 福岡空港へ移動 シンガポール航空機でシンガポールへ (6h45m)時差▲1h シンガポール航空機でクアラルンプールへ (1h)時差なし ホテルへ(1h) クアラルンプール(泊)
2	11月25日 月曜日	クアラルンプール郊外 クアラルンプール	9:30 午後 18:30	専用バス	【視察】 オタフクソースマレーシア ~11:30 【観光】 クアラルンプール市内視察 スンガイワンスーパー、ブキッ・ビンタン地区 【表敬訪問】 在マレーシア日本国大使公邸 クアラルンプール(泊)
3	11月26日 火曜日	クアラルンプール郊外 クアラルンプール	9:30 15:00	専用バス	【視察】 ジマイーストパワー超々臨界圧石炭火力 発電所 【視察】 ペトロナス・ツインタワー 【観光】 クアラルンプール市内視察 クアラルンプール(泊)
4	11月27日 水曜日	クアラルンプール空港 発 ジャカルタ空港 着 空港 発 ジャカルタ	10:10 11:15 12:10 15:00 18:30	MH717 専用バス	マレーシア航空機でジャカルタへ(2h05m)時差▲1h 【視察】 インドネシア商工会議所(KADIN) ~16:30 【表敬訪問】 ジャカルタジャパンクラブとの交流会 ジャカルタ(泊)
5	11月28日 木曜日	ジャカルタ郊外 ジャカルタ	11:00 19:00	専用バス	【視察】 カラワン工業団地(KIIC) ~12:00 【表敬訪問】 在インドネシア日本国大使公邸 ジャカルタ(泊)
6	11月29日 金曜日	ジャカルタ ジャカルタ空港 発 シンガポール空港 着	10:30 午後 20:20 23:05	専用バス SQ967	【視察】 プルタミナ(インドネシア国営石油会社) 【観光】 ジャカルタ市内視察 パサール・バル シンガポール航空機でシンガポールへ (1h45m)時差+1h 機内(泊)
7	11月30日 土曜日	シンガポール空港 発 福岡空港 着 博多駅 発 広島駅 着	1:20 8:10 10:10 11:16	SQ656 のぞみ20	シンガポール航空機で福岡へ(5h50m)時差+1h 博多駅へ移動 新幹線で広島へ 到着後、解散

【所 感】マレーシア・インドネシア経済視察

～ マレーシア・インドネシア経済視察に参加して ～

広島経済同友会

マレーシア・インドネシア経済視察団

副団長 田 村 興 造

(広島ガス㈱ 代表取締役会長)

まだ若かりし頃の1990年代の初め、私の所属する広島ガスは化石燃料として最もクリーンな液化天然ガス（LNG）を、インドネシアの国営石油ガス公社・プルタミナから輸入することを決定し、私は、廿日市工場建設室で工場設備の建設を進めることになった。「海外から直接LNGタンカーを受け入れる設備を建設する。しかも、LNGの受け入れ設備は-162℃の超低温に耐えられるもので、かつ、タンカーが着積する栈橋の仕様は、当該タンカーと整合を図る。そして、その整合性を検討するために、当社側とインドネシア側でシップショア・ミーティング（船陸整合会議）を開催する。田村、おまえ担当じゃけえ、ちょっと出てこいや。ところで、その会議の公用語は、英語らしいで。」と上司、「えー！……（絶句）。」と私。これが、「うちの会社では、仕事で海外と直接接触することはない」と思っていた私が、インドネシアと関係を持つようになった経緯である。

工場の竣工後、私は原料調達部門に異動し、13年にわたりLNG調達の仕事に携わった。この間、1泊3日の出張を含み幾度となく足を運び、国内騒乱によるスハルト大統領の失脚と民主化運動の進展を目のあたりにし、山一證券の経営破綻や香港の中国返還といった一大事件を耳にしたのは、かの地・ジャカルタであった。

インドネシアとのトレードが落ち着いてきた2004年頃、当時交渉を進めていたロシア・サハリンⅡ LNGプロジェクトの遅延に伴う深刻な調達不足に助け舟を出してくれたのが、マレーシアの国営石油ガス会社のペトロナスである。

私は、当社社長を退き会長に就任したのを契機に2017年に表敬訪問をして以来、この両国を訪れておらず、今回の視察はその後の両国の変化を知る良い機会であった。以下、今回視察の所感を簡単に列挙してみる。

(1) 高い経済成長

好不調の波はあるとはいえ、マレーシア・インドネシア両国の経済成長率はいずれも5%前後で高いレベルにある。

クアラルンプールを訪れて先ず感じたのは、この街のシンボルである「ペトロナス・ツインタワー」が、街なかから見え難くなったということだ。10年ほど前までは、この大都会に向かう高速道路から真っ先に目に飛び込んでくるのが、ツインタワーであった。ところが、今回は、林立した高層ビルが邪魔をして、視界を妨げていることに気付いた。そして、さらに驚いたのは、街のいたるところで、ビル建設用のクレーンが稼働していることであった。まさに成長の進行形だ。

インドネシアの首都ジャカルタでも、同様であった。林立した高層ビルにより、移動の目当てとしていたお馴染みのビルが見え難くなっていた。経済活性化の背景として、特に大人口のインドネシアでは、収入の低いボトム層の人々の生活が、就業等の改善によりミディアム層に移行することで、大きな購買力を産んでいるようである。

(2) 交通渋滞の激化

交通渋滞の一層の激化は、想像を超えていた。遅刻を避けるために、インドネシア商工会議所に陸橋を渡り徒歩で向かったこと（治安上の理由で今まで未経験）や、夕食のご招待を頂いた両国の日本大使館に行く際に、渋滞に巻き込まれて遅刻してしまったことなど話題に事欠かない。

特にジャカルタでは、相当量の自動車が増えていること、道路網が欧州のロータリーシステムをベースにしていること、公共交通システムの整備が遅れていることなどにより慢性的な渋滞から逃れられず、そのことを1つの要因として、ジョコ大統領は首都の移転に言及しているほどである。

中長期を見据えた公共交通機関整備の大切さは、インドネシア商工会議所の意見交換の場でもお話しさせていただいた。

(3) グローバル化する世界を実感

今回の視察では、私にとって古くからの友人であるプルタミナやペトロナスの方々、元広島大学留学生の皆さんなど、多くの地元の人たちと再会し、歓待して頂いた。また、インドネシアのバンドン工科大学と学術提携している広島大学が、地元の同大留学経験者等の協力を得て、工業団地での技術者養成における存在感を発揮していることも知ることができた。

一方で、マレーシアでは、ハラール・ソースの製造に道筋を付け当地で好み焼を人気メニューに押し上げたオタフクソースの皆さんや先進的な石炭火力発電所建設に携わっている中国電力や三井物産の皆さん、そして、インドネシアでは、地域貢献を含めた工業団地の管理運営に勤しんでいる伊藤忠商事の皆さんや海外勤務でつながった広島県人会を含むジャカルタ・ジャパンプラブの皆さんなど、異国の地で活躍する日本人の方々の逞しさを垣間見ることができた。グローバル化する世界とよく言われるが、世界は確実に狭くなってきている、そのことを実感した今回の視察であった。

願わくは、いろいろな分野でいろいろなつながりを構築しているこの良い関係を、人的にも地域的にも、さらには、時間的にも、もっともっと発展していければと思う次第である。

■ 【視 察】マレーシア

～ オタフクソースマレーシア ～

堂 本 高 義

堂本食品(株)
代表取締役

オタフクソースマレーシアは、クアラルンプールから車で40分程度西に行ったところにあり、2016年4月に設立された。現在日本人2名（尼田さん、河野さん）、マレーシア人の事務2名、作業員10名で運営されている。主要業務はソース、調味料の製造販売、輸出入販売でハラールでは世界唯一の政府認証機関であるJAKIMより認証を取得している。

視察は尼田さん、河野さんのすばらしいプレゼンの後、実際に工場見学をおこなった。

進出のきっかけは、ファンドからの紹介だったそうだ。

マレーシアでTexchem Resources Bhdを経営し、レストラン部門で「すし金（Sushi King）」を130店所有する小西会長（ダンスリ）は、それまで「すし金」では、タイハラールや、インドネシアハラール適合の調味料を使用していたが、一番厳格で厳しいハラール認証制度であるマレーシアのJAKIMに認証された調味料を供給できる企業を探していた。



それを聞いたファンドから、オタフクさんに「マレーシアにJAKIMハラール対応の調味料工場をつくりませんか？」と相談があり、佐々木直義社長が決断して進出を決めたそうだ。

進出に際しては「小さく産んで大きく育てる」をコンセプトにレンタル工場から始めることとし、尼田さんという人材を派遣しJAKIMハラール承認に向かって動き出した。しかし文化や習慣の違うマレーシアでの操業は大変であった。尼田さんの目に見えない努力

は並大抵ではなかったようだ。例えば、金曜日はイスラムの男性はお祈りで午後休む。そこで金曜日の午後は日本人やインド人で作業するシフトを組んだそうだ。また、「国王に子供が生まれたので明日は休み！」など休日が突然決まり、だれも来ない日があったり、ラマダンの時は1日5回のお祈り

があるなど、こうした様々な紆余曲折を乗り越え2017年3月についてJAKIMハラール認証を取得し、以降順調に業績が推移するなか今後は新工場建設も視野に入れている。

オタフクソースさんのマレーシア進出について、改めて、「オタフクさんの持つ企業の徳」を感じた。まさに「天の時、地の利、人の和」である。本当に素晴らしい工場見学であった。

最後にイスラム教で禁止されているものには、日本でも馴染みの深い豚肉、酒、しょうゆ、みりん、味噌などがある。豚由来のコラーゲンや、アルコールが使われている化粧品などもイスラム教徒には受け入れられない。イスラム教徒が多い中東・アジアに日本企業が進出する上で、さらにはイスラム国からのインバウンド戦略にハラール認証の取得は必須条件になりそうである。

（脚注1） JAKIM認証取得のポイント

- 1) 製造現場に2名のムスリム社員が必要
- 2) 製造を始めてから3か月の実績が必要
- 3) 養豚場や下水処理から離れていること
- 4) ハラール洗浄（ムスリムがお祈りしながら6回洗う）

（脚注2） すし金（Sushi King）の紹介

マレーシアで沸騰している人気メシが日本の回転ずしを模した「すし金（SUSHI KING）」だ。ハラール認証を取得しイスラム教徒からの人気も高いこのすし金を運営するのが、Texchem Resources Bhdというマレーシアの現地企業である。

なんと、このTexchem Resources Bhdを創業し株式市場への上場まで果たしたのが、小西史彦さんという日本人の方だ。

マレーシア・ペナンに魅了され、ペナンに居つくためにTexchem Resources Bhdを創業した小西さん。大成功のきっかけはフマキラーの蚊取り線香だったそう。フマキラーと合弁会社を作り、日本製の高性能な蚊取り線香で売り上げを伸ばしたことで「蚊取り線香王」とマレーシアで呼ばれるまでに成功されたとのこと。

その後、日本の製品を扱うだけでなく現地で開発をスタート、パッケージ包材事業や水産加工業、薬品検査事業、レストラン事業などにも進出し、グループ企業45社、従業員約8,000人、売上300億円を超える超優良企業グループに育て上げた。

「現地の人を理解し、尊重し、助けてあげる」という3つを大事にしてきたことで売り上げも伸びたと小西会長は番組で話されており、日本企業が海外進出する際大切にすべき考え方だと思う。

■ 【視 察】マレーシア

～ ジマイーストパワー ～

榎 本 暢 之

(有)エノモト

代表取締役

【ジマイーストパワーの概要】

(1) 株主・出資会社

TENAGA NASIONAL BERHAD 70% 3B POWER SDN.BHD 30% (3B POWERは三井物産、中国電力が1：1で出資設立した投資会社)

(2) 発電容量

2×1,000 MW

(3) 事業内容

発電所・送電線・変電所・上下水道工事一式、並びに完工後運転保守及び電力の卸売り販売

(4) 総事業費

3,200億円

(5) 商業運転開始日

1号機 2019年8月22日運転開始済 2号機 2019年12月15日運転開始予定

(6) その他

ジマイーストパワー社員は18名で主に日本の親企業から出向
送電線網47キロメートルでマレーシア半島東の10パーセントの電力供給



我々は営業運転開始直前で試運転の最終段階の11月26日に訪問した。

上記の会社概要を伺い想像より大きいので圧倒されながらどこの説明をされているのか聞き逃さない様について行くのが大変であった。

一通りの説明の後工場に入るための安全講習があった。今までいろんな工場見学を体験したが、今回のように時間をしっかり取った講習は受けたことがなかった。しかも“イングリッシュ”で。可愛い小柄な女性が一生懸命説明してくれたが私には理解不能でかろうじて説明文書の右下の絵文字？の禁止マークで何をしてはいけないのか理解していた。

広大な敷地内はバスで移動した。とにかく素晴らしい天気で直射日光が刺すように熱く、普段はヘルメットはあまり被りたくないのだが、この強烈な日差しを遮るのにはとても重宝した。

ジマイーストパワーは技術的には世界一で発電効率を高めるために水蒸気を600度の高温高压にしており、三隅、小野田の発電所よりも43パーセントも熱効率がいいそうである。

東南アジアの中でマレーシアについてあまり知識がなかったが、今回の訪問を通じ日本の技術がしっかりと同国に貢献できていることを知り感動を覚えた視察であった。



■ 【視 察】マレーシア

～ ペトロナス・ツインタワー ～

古 川 浩 延

ゲイソー・ロジスティクス(株)
代表取締役社長

広島経済同友会で毎年恒例となっている経済ミッションに今年も参加させて頂いた。今回は世界の中でも経済成長著しいASEANの中でも依然大きなポテンシャルを持つマレーシアとインドネシアへの視察団派遣となった。個人的には何れも初めて訪問する国であり、またイスラム圏国家という点も初ということで、行く前から大変楽しみにしていた。

本稿では、報告担当となった11月26日訪問の、マレーシアの首都クアラルンプール中心部に聳える、当該国の経済発展の象徴とも言える「ペトロナス・ツインタワー」について報告する。

まずは概要について、

1. 1996年に完成した超高層ビルで、高さ452メートルの88階建て。マレーシアの国立石油会社ペトロナスによって建築された。
2. 2000年代に入り、世界各国の高層建築競争が白熱する中、首位の座は譲ったものの、2本のビルが対をなすツインタワーとしては世界一の高さを維持している（2019年7月現在）。
3. アルゼンチンのシーザー・ペリ&アソシエーツが設計した。海側から吹き寄せる強風に起因する振動を防ぐために一般的な柔構造を採用していない。鋼材を用いずに高強度コンクリートを積み上げる特徴的な構造であり、重厚な造りを醸し出している。
4. 特徴的な建物の施工については、日本の建設会社ハザマがタワー1を、韓国のサムスン物産建設部門がタワー2を、41Fと42Fの2箇所にて設けられた、2本のタワーを結ぶ連絡橋であるスカイブリッジはフランスの建築会社かと、ユニークな国際的コンソーシアムの施工となっている。
5. タワーのベースは、スリアKLCCという、巨大ショッピングモールを基礎とした複合施設となっており、日本の伊勢丹、紀伊國屋書店、ユニクロなどが入居している。



以上、主要な概要についてのみ述べたが、今回の視察について一言。ツインタワーの41・42F部分のスカイブリッジ、86Fの展望フロアには一般客を対象に入場制限が設けられているが、我々の視察では親会社ペトロナス社から企画・広報担当が何人も付き添いで、何れもほぼマンツーマンで懇切丁寧に案内してもらった。特に約600mという高さの展望台から見る街並みは近代的で美しく、整然として緑の多い、目に優しい風景が広がっており、都市開発自体が計画的に進められているビジョンと先見性も実感することが出来た。

最後に、視察の全体的な印象について少し述べておきたい：



- クアラルンプール空港から快適な高速鉄道で市内に入ってくる様子は、郊外は緑の多い美しい田園風景、中心部に入るとペトロナス・ツインタワーを初め超高層ビルが林立、巨大SCが多数存在、それぞれ老若男女問わず多くの人で平日からごった返している。
- マレー系主体のイスラム国家ながら多民族故の多様な価値観、寛容性を体感。街を歩く市民も多種多様な出で立ちで表情は概して明るく、活気に満ちている。加えてそうした多様性にもかかわらず、街中大体どこでも英語が通じる安心感と気楽さがあり、初めて訪れる外国人も困ることはない
- カリスマリーダー、マハティール首相の強力なリーダーシップの下、国民所得は着実に増大しており、アジア危機の影響で若干の遅れはあるものの、悲願の「先進国入り」も手の届くところまで来ている

- 蛇足ながら、マハティールの近代化は、Look East Policyと称し、アジアの一員として日本のモデルを参考にしている

■ 【視 察】 インドネシア

～ インドネシア商工会議所 ～

高 原 哲 也

丸紅(株)中国支社
支社長

ジャカルタ市内中心部にある、インドネシア商工会議所（以下KADIN）を表敬訪問した。

前もって聞いていたが、深刻なジャカルタ市内の交通渋滞に直面し、滞在ホテルからは数百mの距離であったがバスではなく徒歩での移動となったが、ある意味本当のジャカルタに触れる貴重な経験となった。

KADINが入るビルに到着すると、非常に日本語が堪能なバティックを着こなす方がお出迎え。顔つきからインドネシアの方と思ったら、今回のKADIN訪問をご手配頂いた伊藤忠インドネシア会社田沼副社長であり、ご自身はジャカルタ駐在前に広島にもおられたとか。

会議の冒頭、KADIN副会頭より組織紹介（インドネシア各県に支部があり、海外からの事業投資のサポート、中央政府との強い繋がり）、90年代のような日本からの旺盛な投資意欲の再来を期待するコメントが発せられた。

経済同友会からは、佐々木代表幹事から①広島の紹介（マツダ、ダイソー等の企業を擁する大経済都市の一つ）、②海外から広島の価値を見直す、③若い世代が多く成長著しいインドネシアの活力を



KADIN 紋章

視察し広島の活力のヒントを得たい、とのご挨拶があり、続いて田村代表幹事からはご自身の100回以上に渡るインドネシア訪問、初めて広島に天然ガスが輸入されたのはインドネシアからであること、交渉はハードながら温かいインドネシアの方々、というお話があった。

その後質疑応答となり、KADIN側からは天然ガスを始めとしたエネルギー資源、日系企業による工業団地開発、また工業団地に係るLogisticsといった分野に対する事業投資への関心の有無といった質問があり、経済同友会側からは①ジャカルタ市内の大気を清浄にするという点でのビジネスチャンスの有無、及び②首都移転の現状について質問が上がった。加えて、KADIN側の会議参加者に女性が多かったことから、③女性の社会活躍の秘訣についても質問があった。

質問に対するKADIN側の回答としては、①ジャカルタ市内の大気清浄化については、政府方針としてEVの推進を掲げており、首都移転と合わせて議論しているところ、②首都移転の現状は、国会承認前であくまで研究段階であり決定事項はまだ何もないが、以前度々上がった話とは異なり今回はかなり現実的である、ただし移転するのは政府機関のみで経済は引き続きジャカルタ主体であろう、③女性の社会進出について、日本では優秀な女性が結婚すると仕事を辞める傾向があるが、ジャカルタはすぐに復帰する、ただ日本人の友人等に聞くと、日本でも復帰を受け入れる企業が増えているとのこと、一番大事なのは旦那のサポートであることは言うまでもない、と。(後で調べたら、インドネシアでは一般家庭でも家政婦やベビーシッターを雇うのが一般化しており、産後3カ月程度で職場復帰するのが普通とのことであった)

その他やり取りが行われたが、時間の関係から途中で切り上げざるを得ないほど非常に盛り上がった表敬訪問となった。

今回の表敬訪問に際し、(会議当日には時間がなく発言できなかったのもので)以下当方の所見を記します。

① 日本からの投資を期待することに加えて、KADIN殿にはインドネシアのスタートアップ企業等の海外進出をサポート頂きたい。特にスマホのアプリ等に特化した企業の場合、国境や言語の壁を超えるのは比較的容易ではないか。日本でもスタートアップ企業イベントが各地域や各企業で開催されており、こうしたイベントにインドネシア企業からも参加頂くことで、より活性化が期待できる。

② 現状、インドネシア向けの投資がKADIN殿の期待よりは伸びない原因の一つに、同国のカントリールリスクの存在が考えられる。司法を始めとした法規制運用の透明化、及びパートナーに対するモラルの構築といった、投資環境の向上をKADIN殿が主導して行って頂くことで、インドネシア向け投資環境がより整うと思料する。

最後に、今回の訪問のご手配を頂きました、伊藤忠インドネシア会社の皆様に厚く感謝いたします。



visitor list 記帳



会議中の模様

■ 【視 察】 インドネシア

～ カラワン工業団地 ～

野 口 隆 志

(株)ノサックス
常務取締役

訪問日時 : 2019年11月28日 10時より

ご 対 応 : KIIC山口President Director、高橋Director、高見Acting Director

カラワン工業団地 (Karawang International Industry City: 以下KIIC) は、伊藤忠商事とインドネシアの大手財閥シナルマスグループが50%-50%で出資し、1992年から共同で運営する工業団地であり、面積は千代田区に匹敵するおよそ1,380haであり、現在も拡張工事が進捗中とのことであった。入居する企業は現在およそ160社で約80%が日本企業となっている。まずは本事務所にて高橋DirectorよりKIICの強みと魅力について詳細にご説明を頂いたが、特に記憶に残ったのは以下の点であった。

- ① 『好立地』 KIICは主要港タンジュン・プリオクより60km、主要空港スカルノハッタ

空港より80kmと、国際物流ハブとの近距離が強みとのことであったが、主要港タンジュン・プリオクー西カラワン間物流に関しては近年社会問題になるほどの渋滞が常態化しており、これに関しては、ジャカルタ・チカンベック高架の完成が間近であること、また第二主要港パティンバンの開港も計画されていることから、将来的には改善される見込みである、とのことである。



工業団地内視察



ヒジャブ姿のにこやかな受付嬢

- ② 『安定したインフラ』 停電が常態化している同国において電力の安定は重要な課題とすることで、KIICでは現在3ルート of 電力供給を確保していることに加え、政府から「優先供給契約」を受けているとのこと。

- ③ 『CSR』 KIIC内では各進出企業がともに協力し自治会を設け、一体となって地域住民の健康や教育、衛生環境の整備、農業支援や食料の配布、あるいは奨学金支援活動などの社会貢献活動を活発に行っているとのこと。物的支援の具体的な例としては、ベビーフードの配布や蚊の駆除剤の散布、奨学金の提供等があり、ソフト面での支援の例として

は、工業団地内の緑地を農業支援の教育の場として活用するなどがあるとのことであった。

上記解説の後、KIIC構内をバスで回り、多くの企業のサイトを視察した。いずれも清潔で整然としており、当工業団地が非常に高い管理レベルで運営されていることが理解できた。その後事務所に戻り多くの質疑を受け付けて頂いた。

まず、「広島との関わり」については、広島大学工学部とバンドン工科大の共同研究についての言及があった。また、「インドネシア人労働者のレベル」については、「日本人がルーペでわからなかった傷を裸眼で見つけた」など、目がとても良いとのことであった。

「近隣住民の雇用」に関しては、「地域の村長達と会話をして採用を決めることもあり、専門性の高い製造に関わることができなくても、お茶くみやコピーなどの単純労働の枠で雇用することもある」とのことであった。

一方で「撤退の難易度」については、「債権債務の整理などに10年かかる例もあり、非常に難しい」ことで、「人件費の高騰」については近年西カラワンや首都圏での人件費の高騰が進出企業にとって問題となっており、中部ジャワ等への移転を検討する企業も出てきているとのことであった。加えて近年は、ルピア安により輸入する原材料の調達費が上昇しており、これも進出企業の収益を圧迫している問題だとのことであった。

以上はほんの一例であり、その他の制限時間に迫る闊達な質疑応答を通じて、すべての参加者にとって充実した学びの時間となったものと思われた。

■ 【視 察】インドネシア

～ プルタミナ（インドネシア国営石油会社）～

渡 邊 智 幸

三菱商事(株)中国支社

エネルギーソリューション事業グループ

グループマネージャー

1. まとめ及び所感

2008年から2013年までジャカルタ駐在員だった小生にとってそれ以来のジャカルタ及びプルタミナ訪問であった。先ずこの視察に参加させて頂いたことに深く感謝申し上げる。

元々プルタミナはスハルト第二代大統領の開発独裁の一翼として、当時インドネシアの豊富な石油資源の開発に関する全権益を管理管轄する国営石油会社として設立され、その功罪に対する議論は種々あるも、所謂南方原油及びLNGの安定供給により日本の発展を長きにわたり支えてきた存在であった。しかしながら、インドネシアは97年のアジア通貨危機を発端として国際通貨基金IMFの管理下に入り、その融資条件にプルタミナの改革が織り込まれ、以降プルタミナの権限は削がれてきた。それと共に海外からインドネシアへの石油開発投資も減少、2011年以降は石油の純輸入国になっている。



プルタミナ本社手前は Well Head
[油田井戸元のバルブ]

かつてOPECの議長国も務める地位にあったが、既にOPECを脱退済みである。とは言え、インドネシアの国家財政を支えエネルギー政策の実行を担うプルタミナの重責は不変である。プルタミナの説明にあったが今後も油ガス田権益の取得を進め、ガス/LNGにより注力していくとのこと。プルタミナは日本及び広島との長期にわたる好関係を十分認識しており、今後も好関係の継続と日本へのLNG供給の強い意欲も伺えた。中長期には、天然資源の輸出による外貨収入は減少する一方で増加する人口に伴う内需拡大のバランスを取り、かつ独自の収益拡大による国家経済への貢献も求められること等、難しい課題も多々あると思われるが、プルタミナ及び愛すべきインドネシアの更なる発展を願ってやまない。

以下、面談詳細。

2. プルタミナ側 主要参加者

- ・ バスキ・ティコラ Corporate Marketing Director
- ・ アルフィアン Senior Vice President, Gas & LNG Management
- ・ エルニー Vice President, Corporate Strategy & Planning
- ・ エリ General Manager, LNG Commercial
LNG Japan ジャカルタ事務所（コーディネーション、通訳）
- ・ 作間 Chief Representative
- ・ 楡井 Assistant Chief Representative

3. Welcome Speech

(1) プルタミナ社 ティコラDirector

- ・ プルタミナ社はインドネシア政府資本100%の会社で60年以上の歴史を持つ。
- ・ 石油・ガスの探鉱開発/生産を始めとして太陽光等の再生可能エネルギー、発電事業も手掛けており、顧客の需要を満たしてきた。
- ・ 広島との関係は92年にLNG売買契約書を締結したことから始まった。契約自体は満了したが、好関係は92年以来28年も継続中。将来も協力関係を続けたい。
- ・ 同友会一行はKADIN（商工会議所）やカラワン工業団地を訪問したと伺ったが、実り多いインドネシア訪問となることを切に願う。
- 広島経済同友会 佐々木代表幹事・視察団長
- ・ 広島経済同友会の方針・規模・海外部会等紹介。（詳細略）
- ・ 共に代表幹事を務める田村代表幹事は100回以上インドネシアを訪問し、インドネシア/プルタミナは広島に多くの価値をもたらしてくれた。
- ・ 今回の滞在中の渋滞やインフラ事情を視察した結果、未だ多くの開発余地があると感じた。
- ・ 深謝の意。

4. 質疑応答

[Q1：同友会 田村代表幹事]

本日は同友会及び広島ガスとしても深謝申し上げます。プルタミナの歴々にも大変お世話になった。KADINでの面談時、東カリマンタンで有望ガス田があり、条件合えば日本の参画を求められた。日本の国内ガスマーケットは飽和しており厳しいと思うが、拡大市場を持つ海外勢は興味あるのではないかと思う。プルタミナは国内マーケットに注力しているようだが、上流事業はどのように考えているか？

[A1：プルタミナ]

国内マーケットは当然ながら需要に依存する。電気自動車等が出てきて自動車用燃料需要は減少してくるだろうが、国内マーケットはまだ成長余地・経済合理性ある。

一方、上流ではガス開発に注力。国内の石油ガス鉱区の約60%をプルタミナが権益を保有しており、今後更に海外企業が保有している鉱区が期限を迎えるものも取得していく。保有埋蔵量を増加させ、

ガス化学分野にも力を入れ（ガスを使用する）製油所の能力も倍にする予定。

[Q2：同友会 田村代表幹事]

ガスは国内需要を満たした上で、日本に輸出する余地はあると考えて良いのか？

[A2：プルタミナ]

これからも輸出ポジションにある。日本企業のINPEX（国際石油開発帝石）が参画するマセラ LNGプロジェクトは2027年に生産開始予定、またPt. Badak（東カリマンタン ポンタンLNG基地）からも輸出したい。我々は日本にコミットを継続する。

[Q3：プルタミナ]

インドネシアへの投資について、どんな分野が考えられるか？

[A3：同友会 佐々木代表幹事]

我々はソースを製造する会社だが、現在米国・中国・マレーシアに工場有り。次の可能性としてインドネシアもあり得る。今回伺った在インドネシア日本大使の話によれば、2040年にはインドネシアは日本のGDPを抜くとの予測もあり、それだけ有望市場であると理解した。

[Q4：プルタミナ]

改めて93年からのLNG購入に謝意。ご存じの通り、現在LNGの市場状況は良くない（多くのLNGプロジェクトが生産しており供給過多）。日本のエネルギー需要は伸びるか？

[A4：同友会 田村代表幹事]

広島ガス固有の話であるが、二つのオプションによりガス需要を増やしたい。

- ① 水平展開。人口減はあるが、パイプラインの延伸により新たな顧客を掴む。
- ② 垂直展開。各顧客の使用量を増やす。例えば家庭でのガスコージェネ・燃料電池。

石油・石炭火力発電は増やせないし、原発も不透明。従ってガス（LNG）によるクリーンな発電に加え、ローカルでの分散電源によりガス需要増加の可能性有る。

[Q5：同友会 佐々木代表幹事]

2040年にGDP世界4位の可能性に対し、インドネシアの方々はどのような意識か？

[A5：プルタミナ]

現在の成長が続くという前提だろうが、グローバル経済によるインパクトが大きいだろう。景気後退局面も来る。その際は人口が多いためインパクトは低減されるだろうが、GDPの伸びは鈍化・減速する。

[Q6：同友会 佐々木代表幹事]

極東はエネルギー資源に限られており、特に日本は自給率が8.3%である。それに対し資源を持つインドネシアには無限の可能性を感じる。

[A6：プルタミナ]

インドネシアは5～6%GDP成長率。エネルギー消費の伸びは経済成長が理由でなく人口増が理由。



プルタミナ側面談者

■ 【表敬訪問】 マレーシア

～ 在マレーシア日本国大使公邸 ～

栗 田 勇 樹

(株)中国新聞社
経済部記者

11月25日に大使公邸を訪問した。ホテルからの直線距離は1キロに満たないが、一方通行と渋滞に阻まれ、予定より到着が遅れた。岡浩特命全権大使をはじめ、大使館のスタッフの皆さんが温かく迎えて下さったのが救いだ。前日は移動日だったため、視察は実質的にはこの日がスタート。人と車、バイクが行き交うクアラルンプールの洗礼を浴びた気がした。

大使は着任から2週間ほどだが、「多面的な国だと実感している」という。ペトロナスツインタワーなどの高層ビルが林立する一方で、空港の間近まで緑が迫るなど自然も豊か。また、マレー系と中国系、インド系の民族が入り交じる街角で見掛けるファッションも多彩で、保守的な傾向が強いイスラム国家のイメージは当てはまらないとのことだった。

私は初めてマレーシアを訪れた。マハティール政権下でのルックイースト政策の印象が強い。親日的な雰囲気は今も感じるものの、大使の説明には驚かされる点もあった。世界の大学ランキングでは日本との差は縮まりつつあるという。ビジネス環境については、既に日本は追い抜かれている。多くの指標の中の一つとはいえ、マレーシアの成長のペースは想像以上に早いと感じた。ASEANのほぼ中心に位置する地政学的な優位性に加え、英語が当たり前にも通用することも強みのだろう。

スタッフの方からは政治、経済情勢についてのレクチャーも受けた。特に興味深く聞いたのは、1957年の独立以来初の政権交代が起きた、2018年5月の選挙以降の動きだ。消費税の廃止に伴う税収減や、私たちも苦しめられた渋滞解消に向けた地下鉄の建設など、課題は山積している。経済成長の伸びを欠く中、財政再建と公共投資のバランスをどう取るかが問われると言える。

これらの問題には、政権交代がなくてもいずれ直面したはずだ。先進国入りを目前にして成長率が鈍る「中所得国の罠」という言葉も思い浮かぶ。とはいえ、日本に比べれば若年人口の割合が高く、経済成長率も依然大きいことは疑いない。国内のほぼ全域に1400社の日系企業が進出しているとのことで、マレーシアの浮沈は人ごとではない。かつて日本を目標としていた同国に、今も示すことができるものがあるだろうか。範を垂れる時期はとうに過ぎた今、互恵的な関係の中で双方が見いだすほかない。心尽くしの料理を頂きながらそう考えていた。



■ 【表敬訪問】 インドネシア

～ 在インドネシア日本国大使公邸 ～

藤 田 洋 一

伊藤忠商事(株)中四国支社
支社長

11月28日に在インドネシア日本国大使公邸を訪問、石井正文特命全権大使よりインドネシアのお話を伺った。市内大渋滞で大使公邸への到着が大幅に遅れたが、視察団を温かく迎え入れて頂き、実に分かり易くお話し下さった。

インドネシアは面積が日本の5倍、人口は2倍、東西の幅は5,100kmにも及ぶ大国。GDPは日本の1/5と世界第16位ながら、一人当たりGDPは1/10で第118位とまだまだ発展途上にある。一方で、平均年齢は日本の47歳に対し30歳、高齢化率（60歳以上の人口を15歳以上、60歳未満の人口で除したもの）も日本の64.5%に対し49%と、大きなポテンシャルを感じさせる国であり、2050年にはGDPで日本を抜く見通しである。

庶民派のジョコ大統領は、インドネシア最大のイスラム団体の長老であるマルフ・アミンを副大統領に迎え4月の大統領選に勝利、二期目（2024年まで）に入った。10月の組閣で大統領選の対立候補であるプラボウォ党首を入閣させ、連立政権で国会議席の74%を確保したが、6党連立の運営は容易ではない。

ジョコ政権は、人材育成、インフラ開発、経済規制緩和（輸出促進）の三つを優先課題に掲げ、特に人材育成を最重要課題に位置付け、日本政府としても特定技能制度を開始し既に22,000人の研修生を受け入れ、これを更に拡大する方針。インフラ開発では、最大の社会問題である道路渋滞の緩和に向け地下鉄・幹線鉄道の拡充と新港の建設を進め、日本政府もこれを後押しする。

日本はシンガポールに次ぐ世界第2位の対インドネシア直接投資国であり、過去10年の累計投資額は310億ドルに及ぶ。中国は第7位で100億ドルだが早々に日本に追い付く見通し。一方、同国に進出している日本企業は1,800社に及び2万人が駐在しているが、自国民を労働者として大勢連れて来る中国企業とは対照的に、2018年度で7百万人を超える現地雇用を創出している。更に、日本企業は同国GDPの8.5%を生み出し、同国GDPの70%を占める輸出の1/4を担う等、日本のインドネシアに対する貢献は非常に大きい。

人口が、かつては毎年5百万人、現在でも3百万人増加するインドネシアは、確かに巨大消費国として大きな魅力を感じるが、現在のGDP成長はこの人口増によるものが大半である。そもそも「総人口の僅か5%を占める華僑が経済全体の90%を占める」と言われるいびつな社会構造の中で、富裕層と貧困層の格差は一層拡大すると懸念され、安い労働力に支えられた製造業の発展は暫らくは続くと思われるが、まさに政府が掲げる人材育成が2億6千万人の国民のどこまで浸透するのか等、真の国の発展には不安を感じる。

さて、ジョコ大統領は今年の8月に、首都をジャカルタからカリマンタン島東部に移転すると発表



した。国としての決定までにはまだまだ紆余曲折があり、膨大な移転費用や自然界への影響、森林火災等のリスクも懸念されているが、ジャカルター極集中に起因する深刻な道路渋滞や地盤沈下問題、災害リスクに真剣に向き合う姿勢は高く評価したいし、是非それを実現、成功させ、首都一極集中に何ら策が講じられない日本に対する警鐘となる事を期待したい。



■ 【表敬訪問】 インドネシア

ジャカルタジャパンクラブとの交流

古 本 竜 一

(株)古本建築設計
代表取締役

11月27日にジャカルタジャパンクラブとの交流会に参加した。

上田京治副理事長は、インドネシアパナソニックグループの渉外担当代表。赴任して7カ月とのことだったが、特産のバティックのシャツを着こなしておられた。あいさつではジョコ・ウィドド大統領の10月の就任演説に触れ、独立100年の2045年にはGDPを7兆ドルに押し上げ、世界のトップ5に入るとの目標を紹介した。現在年間5%台の経済成長を8～9%台にアップさせる必要があり、「野心的な目標」とのことだった。その「野心」が絵空事ではないところがインドネシアの強みである。過去に何度も取り沙汰されてきた、ジャカルタから東カリマンタンへの首都移転も再び議論されている。ジャカルタを中心とする交通渋滞による経済損失は年間7500億円との試算もあるそうで、首都移転の必要性は高まっているとのこと。

ジャカルタジャパンクラブは、1970年創設のインドネシア最大の日本人コミュニティである。日本人同士の交流のほか、政府への政策提言を続けるなど、商工会議所や経済団体としての性格も持つ。

交流会では、広島発祥の五洋建設やダイキョーニシカワ、中国塗料、広島銀行、ツチヨシ産業の現地拠点や現地法人の代表者の方が出迎えてくださった。広島銀行はシンガポール支店長で、インドネシアやマレーシア、フィリピンなどのASEAN諸国を担当しているほか、インドやバングラデシュも担当エリアとのこと。経済圏の広がりを実感させられた。

また、インドネシアから広島大学への留学を経験した元留学生の皆さんも参加してくださった。政府で再生可能エネルギーを担当したり、大学で教鞭を執ったりとご活躍で、「広島は第二のホーム」と言ってくれる方もおり、繋がりを実感して温かい気持ちとなった。

アトラクションでは現地の民族舞踊もご披露いただいた。鮮やかな衣装に加え、扇子や皿を手に舞う姿に魅せられた。記念写真にも気さくに応じて頂き、和やかな会となった。



■ 【所 感】 マレーシア

～ ブキッ・ビンタン地区 ～

狩 野 牧 人

(有)トッツ

代表取締役

ブキッ・ビンタン地区は、クアラルンプール中心部にあるマレーシア随一の繁華街エリアである。最もお薦めのショッピングスポットは2007年にオープンした「パビリオン」。高級ブティックや有名なブランド、ローカルショップ、レストランなど500店以上のテナントが入る大型ショッピングセンターで、見て回れば1日は優にかかる広さで、規模だけで言えば、日本最大級の千葉幕張レイクタウンmoriに匹敵するほどの広さがある。又、「パビリオン」はメインエントランスから入るとセンターコートと呼ばれるシンボルエリアがあり、ここで季節のイベントや様々なプロモーションが行われ、12月には巨大クリスマスツリーなどのデコレーションが施され、クリスマスムードいっぱいの空間に早変わりするとのことであつたが、これも経済成長都市クアラルンプールの活気ある街を象徴するものと感じている。

ブキッ・ビンタン地区のショッピングモールには「パビリオン」以外に「スンガイワンプラザ」というマレーシアのローカル感漂うモールもある。

尚、既に観光地化されている「アロー通り」もブキッ・ビンタン地区では有名なエリアで、個人的に大変興味深いクアラルンプールで一番の屋台街だ。滞在時の昼間は静かな通りであつたが、通りの街灯が灯り始める頃、店先の道路にテーブルや椅子がズラリと並び続々と屋台がオープン、観光客も地元民も入り混じり賑わうとのことであつた。マレーシアは多民族国家なので、屋台でいただけるグルメも多国籍……この度は時間の関係もあり立ち寄れなかったが、ぜひ一度堪能してみたいと考えている。

以上のように、ブキッ・ビンタン地区は、大型ショッピングモールや高級ブティックなどが立ち並ぶ一方、屋台や安宿、マッサージ店などが軒を並べる市民の生活の場となっており、何でも揃っていて便利なのは言うまでもないが、非常に混雑しているので、私達観光客は窃盗などの被害に遭わないよう、十分な注意が必要であると感じている。

又、クアラルンプールはタクシーを利用する観光客が多いことで有名であるが、ここブキッ・ビンタンに限っては朝夕の交通渋滞に



巻き込まれることも少なくない為、鉄道（モノレールや2017年夏に全開通した地下鉄）を利用するか徒歩での散策がオススメとの情報もいただいているので、今後機会があれば参考にしたいと考えている。

この度のマレーシア・インドネシアの視察研修旅行に参加させていただき、クアラルンプールやジャカルタの近代的かつ広大な建造物が象徴するように、経済成長著しい両国の勢いを肌で感じる事が出来た。又、ブキッ・ビンタンの広大なショッピングモールも堪能でき、各視察場所でも様々なお話が聞けたことで、私にとって良い経験となった。本当に有難うございました。

■ 【所 感】 マレーシア

～ もう一度行きたい国、マレーシア ～

小 林 通 匡

ニッキフッコー(株)

代表取締役社長

この度の報告は、全くの私事ではあるが自戒の念を込める意味で、スタートの大失敗談から始めたいと思う。11月24日の穏やかな朝、私は愛犬サムくん（黒豆柴）と近所を散歩していたところ、日曜の朝にしては珍しく携帯電話が鳴った。手に取ると幹事旅行社のM嬢からで「小林さん今どこに居られますか?」「ん?なに?」と思いつつ、M嬢の声の後ろで広々とした空間に響くアナウンスの声が聞こえた瞬間、全身に鳥肌が立った感触を今でもハッキリと覚えている。私は出発日を1日間違えていたのだ。後は何を話したかよく覚えていないが、皆さんは福岡空港で既に搭乗準備の最中で今から追いかけても間に合う訳もなく、M嬢も引率作業に忙しいので「ひとりで現地に行きます」とだけ答えて電話を切った。

直ぐに帰って航空会社のホームページをみると、運の良い事に昼過ぎスタートで広島～成田～クアラルンプールへの便があり、乗り継ぎ時間も短く、おまけに席にも余裕があった。直ぐに予約を入れて荷物をそろえたところで、ようやく脈拍は平常値に戻ってきた。乗換えの成田空港では偶然にも、同じ呉支部のO直前支部長とも合流し（彼は予定通りの便）、空港ラウンジでふたりがビールで結団式を行い、一路クアラルンプールに向かった。当日の夕食には間に合わなかったが、2時間遅れ程でホテルに入ることが出来、初マレーシアへの旅はバタバタのうちに初日が終わった。

さて、夜は明け2日目からは何食わぬ顔で視察に合流。経済視察研修には現地の企業訪問等々、多くの学びがあるが、視察の楽しみという何とんでも食事と裏通りの散歩、そして現地スーパーでの買い物だ。ただ、食事をする中で中国や東南アジアで何度も痛い目に合ったのが香草の香りで、何回食べても免疫が出来ず、食事をした瞬間口の中に広がるそれは、アサリを食べた瞬間に「ジャリッ」と砂を噛んだ時と同じように食欲が一瞬で失せてしまう。



マレーシアは多民族から構成されていると聞いていたので、行く先々で何料理が出るのか分からずどうなる事かと心配をしていたが、結論から言うと3日間で全くその様な残念食はなく、逆に何処でも美味しく食事が頂けた事に驚いた。また、幹線道路にある街灯の支柱にKFCのデジタルサイネージがやたら多くあるのが気になっていたのだが、宗教上の問題で豚の食べられない方、牛の食べられない方が多くおり、消去法で鳥と魚が食材として選ばれているのは、様々な食材を上手くアレンジして料理を発展させる日本の食文化と違いを感じた。

また、新たな食の出会いもあった。マレーシアといえばドリアンを連想するのであるが、さすがにその物を食べるのは抵抗があるのでドリアン入りのチョコレートやポテトチップスをスーパーのお姉さんに勧められるまま買って食べて見たところ、少し不思議な香りと舌に残る苦みが程よくありビールに合い美味であった。

街並みは首都のクアラルンプールと周辺の街しか歩いていないので、全てとは言えないが、高層ビルを除いた多くの建物は、南国の自然や果物を連想させる淡く明るい色で塗装をされており、自然に目に入ってくる色彩は街中でも日本人にとって落ち着いて過ごせる印象を受けた。逆に高層ビルは圧巻と言うべき高さ



と独特のデザインを誇っており、存在感抜群のビルが沢山あった。有名なペトロナス・ツインタワーには建築中に片方のビルが傾き、それぞれの建築を担当した日本企業と韓国企業が問題を相手のせいにした話は有名であるが、その点についてその日のガイド役がハッキリとしたジャッジをしなかったのは、日韓の争いはこの国にとってさほど関係の無い事であると伝えている気がした。

視察が終了した後に街を歩くと、歩道と車道の区別がハッキリしていて歩きやすく整備されていた。所々にある工事現場も日本同様に安全対策がなされており安心して歩け、ゴミが散乱している所もなかった。アジアの各都市でありがちなけたたましいクラクションを聞く事もまず無く、台北のようにバイクや自転車が日本以上にビシーーーーッと綺麗に並べられているさまは、首都クアラルンプールに住む人たちの教育レベルの高さを感じさせられた。

マレーシアは、近いうちにもう一度行ってみたいと感じる穏やかで魅力あふれる国であった。次に行く時は、今回体験出来なかったCIMBクラシックでのプレーと、ハラール認証のオタフクソースをタッブリかけたマレーシア風お好み焼を食べたいと思っている。

■ 【所 感】 マレーシア

～ バトゥ洞窟と宗教について ～

山 本 美 香

新庄みそ(株)

代表取締役社長

「ハラール」を理解することが個人的に第一目的であったことから今回はマレーシア視察のみ参加させて頂いた。当初レポートを担当する予定だった場所が雨で視察中止となったため離団した後、空港行き迄の時間に訪問したバトゥ洞窟について述べてみたい。

その洞窟はとても壮大なマレーシア随一のヒンドゥー教の聖地と言われている寺院であった。

マレーシアにおいて信仰されている宗教は、国民の約60%を占めるマレー系ではその殆どがイスラム教徒、25%が中国系で仏教徒、9%がキリスト教徒、7%がインド系でヒンドゥー教徒という内訳となっている。

ハラール工場などイスラム教への対応について学んだ後、敢えてヒンドゥー教寺院を訪問してみた。

クアラルンプール中央駅から北へ約10km、そのインパクトある黄金像と急勾配な272段の階段は事前にチェックしていた画像の印象以上で、その大きさに圧倒され仏像好きな私（笑）は興奮状態であった。

そのシンボル像はムルガン神像といい高さ約42mもある。階段までの側面にはヒンドゥー教ならではの祈りの象徴であるカラフルな象達が可愛らしく、今時で言うインスタ映えする風景でもありメインの洞窟に入るまでの間も楽しめた。

いよいよエントランス。こちら祈りの象徴である小さなカラフルな神像等が屋根に沢山並び、柱にも象徴の龍が煌びやかであった。272段のレインボーカラーの階段に突入。観光客以外はやはりサリーを着た女性も目立っていた。余談ではあるが急な階段であるため、短めなスカートでは女性は厳しい。幸いパンツスタイルでよかった…



ヒンドゥー教とイスラム教のわかりやすい違いとして、まず女性の衣装はサリーに対し頭に巻くヒジャブ等。食べ物には神聖な動物であるため牛を食べないことに対し、イスラム教では不浄な生き物として豚を食べないしアルコールも飲まない。更に断食期間もある。

習慣として朝のお祈りから始まることは共通な様だが、1日5回の祈りの時間を持つイスラム教徒（オタフクさんのハラール対応工場ではお祈り部屋も見学させて頂いた）と、決まりのないヒンドゥー教。また沢山の神様を信仰する多神教と、一神教（アラーの神一本）。どちらかというと、ヒンドゥー教の方が自由な印象である。

272段の階段を登りきるとそこは神秘的で大きな鍾乳洞。約4億年前からの石灰岩で形成されているらしい。馴染みのあるところでは秋芳洞の鍾乳洞のようにつららの様な石柱が沢山あるイメージである。

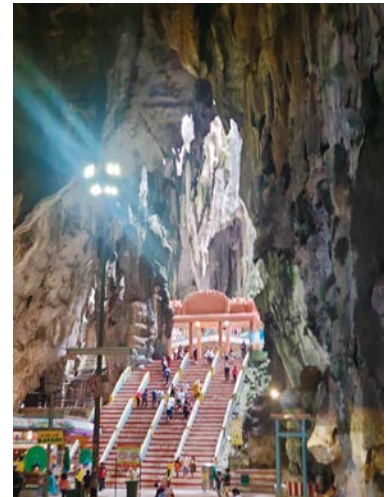
壁面などには、神話に基づく表情豊かな展示物が沢山あり、中心となる寺院では現地方式のお参りも体験できた。お花やお香を供え、額に赤と白のペイントを施し大変興味深かった。

その後の移動では、車窓よりブルーやピンクのイスラム教徒のためのモスクや、中華系のための仏教のお寺も眺めることができ、より一層現地の宗教感の理解が深まった気がする。

マレーシア人はとても優しい人柄であり、他宗教への理解を持ち行事も融合しているとの話があったが、正にそれを多少なりとも肌で感じることができた。

世界の宗教人口を調べてみると、1位はキリスト教の20億人で、ついでイスラム教13億人、ヒンドゥー教9億人、仏教4億人であるとのこと。しかし2050年にはイスラム教徒がキリスト教徒を上回ると言われているらしい。

今年オリンピックもあり多様な民族が大勢来日する。企業では外国人の採用も増えており、将来的には日本への移民も増えていくといわれている等、私個人は仏教徒であるが、日本もマレーシアの様に多宗教国家であると言える日が来るのも近いのかもしれない。そのためにも他国、特に宗教への理解を深めることは彼らを理解する上で非常に重要なことであると痛感させられた。短いマレーシア滞在ではあったが、個人的には特に宗教を意識した視察となり充実した日程を過ごせ感謝している。



■ 【所 感】 マレーシア

～ マレーシアの食について ～

篠 原 幸 一

ツネイシカムテックス(株)

代表取締役会長

【全体的な感想】

今回が同友会の海外視察研修は初めての参加であった。最初にこの視察研修を企画・準備いただいた事務局の方々に御礼申し上げたい。

まずもって、広島経済同友会の会員数が約900名と、東京、愛知について国内で3番目の規模であることには正直びっくりした。また、他の経済団体と違ってその分野に秀でた企業の経営者が多く参加している印象を持った。

マレーシアの一般家庭の電気代7～14円/kwh（日本に比べてかなり安い）、電気卸の電気代6～7円/kwh経済成長が加速されるベースでもあると考えられる。

インドネシアPETRONAS社、1974年設立の国営エネルギー会社。日本への最大のLNG供給会社、2019年も170カーゴを輸出している。これからの輸入エネルギー供給について先人のこれまでの取り組みについて敬意を払うものである。

私に与えられた報告のテーマはマレーシアの食についてであったが、ハラール他の調査については専門の方が別途報告されると思うので視察で食した食べ物・マーケットで受けた印象を中心に報告させていただきたい。

【食事の感想】

食の味覚は個人の感覚によるものが多いと思われるのでその点のご容赦いただきたいうえで、感想と食事の写真を列挙してみる。

- ・マレーシアの食事は日本人によく合うものであった。
- ・食材が海鮮について豊富（海に囲まれているから）
- ・中華、インド、その他折衷の料理もあり世界中の料理を食することが可能。
- ・インド系の人々が給仕をほとんど勤めている大きなショッピングモールでは、日本のコーナーが随所にあった。



たこ焼き

☆マレーシアの食 11月25日（2日目）

- ・果物、スイカ、マンゴー、パイナップル、南国特有で果物は豊富。
- ・イスラム教の国ではあるが、アルコール制限はレストラン、ホテルでは感じない。
- ・スチームライス中心+御菜



北海道 ROYCE

☆マレーシアの食 11月26日（3日目）

- ・昼はマレーシア料理
ごはんと一緒に食べる日本と同じスタイル。
エビ、乾燥牛肉、トリ唐揚げ他小皿に取り分けられている独特のスタイルであった。
- ・赤ワインも美味しい
- ・tigerビールも豊富



☆夜は56階、展望レストラン

- ・エビ入り、アボカド入り、サラダ
- ・180gテンダーロインステーキ
（日本人に合う、美味しい！）
- ・多数のスイーツが販売されていた
- ・フランスのマカロンも販売されていた
- ・食品スーパーは品物豊富
ドライマンゴ、ドライドリアン（くさいフルーツ：呉さん曰く、長谷川香料使用）



☆大使館での料理は格別によかった



■ 【所 感】 マレーシア

～ 地元の人の生活、文化、街並みなど ～

田 村 満 則

ヒロコンフーズ(株)

代表取締役社長

マレーシアはマレー半島（国土の40％）とボルネオ島北部（国土の60％）を領土とする。領海はシンガポール、フィリピン、ベトナムと接する。国家元首たる国王（アゴン）は13洲のうち9州にいる君主による互選で選出され（実質には輪番制）任期は5年。世界でも珍しい世襲ではなく選挙で選ばれる任期制の国王である。

一人当たりの名目GDPでは10千ドルを超えている。多くの東南アジア諸国が欧米列強の植民地支配の影響のため発展が遅れ社会主義での失敗や工業化が進まない中で、マレーシアは約170年間植民地支配されていたにも関わらず日本を手本に工業化と経済成長達成した事でシンガポールと共に‘東南アジアの優等生’と呼ばれている。

マハティール首相時代に様々な分野において国産化を推進する政策を打ち出した。なかでも国産車については、日本の三菱自動車の技術導入した自動車メーカー‘プロトン’や、同じく日本のダイハツ工業の技術を導入した小型車メーカーのプロドゥアを設立し、政府の手厚い保護もあって国内シェアの60％を両社で占めている。しかし民族間での貧富の格差も大きな課題がある。

マレーシアは人口の60％をマレー系、30％を華人系、10％をインド系が居住する多民族国家である。また、人口の15％が移住した人である。2012年のGDPは華人が6,366リンギ、インド系が5,233リンギ、マレー系が4,457リンギであった。華人が最も豊かなのは、マレーシア経済において支配的立場にあるためであり、ペトロナスやプロトンといった政府系企業においてはマレー系が独占的な立場を有する。

ただ、すべてのマレー系住民が恩恵を受けているわけではない。結果としてマレー系コミュニティにおける経済格差は他民族と比較して極端に大きく、経済格差の規模は東南アジア最大である。宗教はイスラム教が国教で、マレー系を中心に広く信仰されている。中国系は仏教、インド系はヒンドゥー教徒が多い。その為マレーシアの文化はイスラム教が生活に根付いている。マレーシアで売られている食品にはハラールマークがついていて、イスラム教徒が安心して食べることができる。

また、オタフクソースマレーシアでも拝見したが、ホテル等でもイスラム教徒がお祈りする部屋が設置してある。マレーシアでは左手は不浄の手とされていて、左手で食事したり握手をするのはタブーとされている。マレー系とインド系の人々はトイレではホースを使い水で洗った後、左手で使って綺麗にする。その為にトイレはいつも水浸しで街中のトイレにはトイレットペーパーが置かれていなかった。なお便座も水でぬれているのでティッシュペーパーを持ち歩く必要がある。

マレーシアでの公共交通機関は発展途上であり車での移動は不可欠である。クアラルン



プールの交通渋滞は通勤時間帯には特に酷く、数kmを移動するのに1時間30分掛かる場合もあった。また、バスでの移動中に見かけた景色は運転が荒い点である。また、マレーシアの道路は信号が少なく、合流、分流が非常に多い。その為に頻繁に車線変更をしなくてはならないがウインカーを出す車は少数であり、その他には複数車線を一気に斜めに横断する追い越しもある。



加えて命知らずのバイク乗りがたくさん走っている。世界保健機構（WHO）の発表によると交通事故による死者数はマレーシアの場合、10万人あたり25人と日本の4.3人に比べなんと約5倍に上っている。一方イギリスの植民地時代から道路が整備されており、高速道路網の整備は非常に進んでおり、名残の右側通行は日本人にとって非常に安心感がある。

街中の標識にはひたたくり注意と表示してある標識がある。一般に‘マレーシアは治安が良い’とされているようであるが、そうとも言えないようだ。マレーシアの殺人事件発生件数は日本の2倍、強盗は日本の25倍との統計もある。近年中東やアフリカから治安悪化を理由にマレーシアに移住する人が増えているそうであるが、日々銃撃戦があるような国の人たちからするとマレーシアは天国のように安全なのだろうが、日本と比較すると治安は悪く感じた。

ただ、気候については、1年中暑いマレーシアであるが、日本の夏に比較すると最高気温は30度～33度で、最低気温は23度～25度で朝晩は涼しく感じる。カラッとしており湿気が少なく過ごしやすい気候で体にやさしい気候であったと思う。また、こうした気候が背景にあるのかマレーシア人は大らかで細かい事をあまり気にしない風潮がある。時間には遅れる事が多くマレーシア時間と言われているがそれを気にする人がいない国である。また、笑顔が多くみられる国でもあるので、訪問時にも非常に気持ちの良い環境であったと思った。

■ 【所 感】 マレーシア

～ マレーシアの視察を振り返って ～

吉 田 豊
白井汽船(株)
代表取締役社長

《視察先を中心に全体を通じて感じたこと》

私は約10年ぶりにマレーシアを訪問した。前はシンガポールから陸路バスで入国したが、今回はシンガポールから空路で入国した。普段、一年の半分以上をアジアで過ごしている私にとって、マレーシアのイメージはペトロナスのツインタワーくらいで、アセアンのVIPと呼ばれるベトナム、インドネシアそしてフィリピンの発展から遠く及ばないと思っていたところ、今回3泊4日の短期間であったがイメージが大きく変わった。人口3,200万人のイスラム教徒の国であるが、首都クアラルンプールは大都市で空気の綺麗なすばらしい国であった。

最初の訪問先は、オタフクソースマレーシア。団長の佐々木代表幹事の現地法人であった。なんとイスラム教徒国という広い視野にたって地政学的な視点からマレーシアを選んでおられた。ハラールの認証を取得され売り上げも伸び、お好み焼きをはじめとしたソースやお酢をハラールエリアへ供給しておられた。現地のイオンでもお好み焼きがたくさん売られ人気であった。お好み焼きの普及で広島食文化をイスラム教徒の国々へ販路を拡大する戦略に脱帽だ。お土産にハラール対応のソースをいただいた為、帰国してから実際に使ってみようと思った。



ランチはシーフード。日本人でもまったく問題なし。雨季の為、現地のマーケット視察を断念し、スーパーマーケットを視察。生鮮食品はじめ、品数も豊富で日本人の現地の生活も全く不自由を感じない。夕方、日本大使公邸を訪問し、岡全権特命大使及び経済班長によるブリーフィングを拝聴し、懇談会に参加。とても和やかな雰囲気の中でマレーシアの経済の現状を拝聴した。



二日目は早朝からマラッカ海峡に面したジマイーストパワー超超臨界圧石炭火力発電所を視察。2号機は12月の本格稼働を目指して最終の試運転調整を実施されていた。熱帯らしい暑さの中にも関わらず設備を詳しく説明して頂いた中国電力さんや三井物産さんの皆様に感謝。この発電所の完成により、マレーシアの電力需要の10%をまかなわれるとのことであった。中電さんの国際協力に脱帽。ちょっと残念なのが、中電さんの環境技術の最先端の設備の導入ではなかった点。地球温暖化を抑えるためのGreen House Gas (GHG) の削減に地球規模で取り組む時代に、マレーシアの法律はそこまで要求しないと理由のようであった。午後はペトロナス・ツインタワーのVIP扱いで展望台からクアラルンプールのパノラマを十分に視察することができた。夜は、レストランでステーキを食べながら短い滞在を振り返り歓談した。

今回の視察を通じ、クアラルンプールのバスは天然ガスがエネルギー。最近、排気ガスの削減からアジアでも大型バスのエネルギー源として導入が始まっている。また、ガイドさんが今後5年間で高層ビルを300棟建設計画があると言われていた。そのうちニューヨークの摩天楼のようになるのかなと複雑な思いをした。私としては自然環境を残したスマートシティとして都市開発を行いマレーシアの良さを未来社会へ引き継いでもらいたいと感じた。

マレーシアというとオラウータン、タイガー、ワニという自然動物の宝庫のイメージであったが、今回の視察を通してアジアの発展の凄まじさに驚愕した。

■ 【所 感】マレーシア

マレーシア ～ 新興国から更なる高みへ ～

藤 井 伸 一

三井物産(株)中国支社
支社長

11月24日夜の到着から同27日午前までマレーシアに滞在、この間オタフクソースさんのマレーシア工場、在マレーシア日本国大使公邸、ジマーイーストパワー超々臨界圧石炭火力発電所、ペトロナス・ツインタワーを訪問、視察した。

クアラルンプール市内の移動に加え、郊外にも二度訪れたが、総じて道路は綺麗に舗装され、又ゴミなどが路上に放置されることもなく、その整然とした様はその他の東南アジア諸国とは一線を画したものであった。クアラルンプール中心部はさすがに渋滞で流れが滞っていたが、それでもその後訪れたインドネシアのジャカルタと比較すれば、時間が計算でき、軽微なものだったと言えると思う。又、クアラルンプール市内は大型ビルの建設ラッシュで、それが多少混とした印象を与えていたが、一方でこれら建設中のビルが建ち揃った暁には、近代的なアジアを代表する都市に仕上がることを十分期待させるものであった。



オタフクソースマレーシアには、今春一度お邪魔していたが、僅か9ヶ月で製造ラインが一気にフル稼働状態にまで事業拡大していることに驚きを覚えると共に、マレーシアの市場としての成長力とお好み焼きがこのマーケットにビルトインされつつあることを実感した。マレーシア滞在中に食した同国の食事が総じて今回の訪問団メンバーにacceptableな味付けだったことから

考えても（好みに近い？）、お好み焼きは同国では十分ポテンシャルがあると考え。現地で説明頂いた尼田さんの「マレーシアの人は親日で温かい。前任地の中国とは対照的」とのコメントは、中国駐在7年の小職にはその実感が良く伝わって来る言葉だった。

ジマーイーストパワーも自身二度目の訪問であったが、前回が1号機建造中、2号機手つかずの状態だったのに対し、今回は十日余り後に2号機の商業運転開始を控えたタイミングでの視察となった。2機で計約2百万KWの出力で、マレーシアの大陸部分の総電力需要の10%を供給するという使命を担ったプラント。旺盛なマレーシアの電力需要の一端を担う事業に日本企業として参画出来たことに改めて喜びと責任を感じる訪問になった。

在マレーシア日本国大使公邸では、岡大使並びに経済部長から説明を受けたが、特に印象に残ったのが、イスラムがマジョリティの同国にあって過激化が一定程度抑制されているのは中華系とインド系の存在があるからとの説明。経済界を牛耳る華人に対する排斥があった同国であるが、一方でこう

した一種のダイバーシティが国の安定と成長を支えている説明は、現地を視察したが故の納得感があった。

尚、郊外への2度の移動の道中、流石に都心から50 kmを超えると道路の両側にパームのプランテーションが続いていたが、より近郊では寧ろ宅地や工業団地の開発が目についた。マレーシアは世界第2位のパームオイルの産地であるが、オイルメジャーにとって今や不動産業が収益の大きな源泉となっているとも聞いている。一人当たりのGDPも1万米ドルを超えており、同国が経済の構造変化と共に新興国から更なる高みを目指していることを実感させる訪問、滞在であった。



■ 【所 感】 インドネシア

～ パサール・バル ～

奥 原 祥 司

コトブキ技研工業(株)

代表取締役社長

パサール・バルはジャカルタの中心から北に位置しているコタというエリアにある小さい店の連なった商店街である。インドネシア語でパサールは「市場」でバルは「新しい」という意味なので、パサール・バルは「新しい市場」ということになるが、その言葉とは裏腹に1800年初頭に建設されたジャカルタ市内で最も古い市場で、かつてその全盛期にはオランダ植民地時代の上流エリート達が訪れる高級な場所であったそうだ。

正面ゲートにはオランダ語で「BATAVIA PASSER BAROE 1820」と綴られており、BATAVIAとはオランダ植民地時代のジャカルタの名称とのことで歴史を感じながらも何となく中国の雰囲気のあるゲートと不思議に感じたが、後で調べてみると1998年に終わったスハルト政権後に建てられたものということが分かり、観光地用に作られたものかも、と思うと報告書を作りながら少々がっかりしてしまった。

通りを歩くと、布・靴・家電・楽器・雑貨となんでも揃っている様であった。その中でもダイソーのお店（東広島のダイソーのお店かどうかは不明だが）があったことにはビックリしたが、ドアや窓の無い他店とは違ってガラス製のドアの横に定員さんが立っている様子は、現地のお店とは少し異なる雰囲気があった。

更に通りを歩いていても同じ様なお店が並んでいるように感じたが、通りの端の雑居ビルの地下に入ると外の通りとは全く違う感じで、2 m程度の間口のお店が所狭しと連なっていたが、その殆どがミシンを店先に置いた縫製屋さん（？）の様なお店だった。





縫製屋さん街を抜けると、今度は生鮮食品も含めた食料品街となり、肉・魚・果物・お菓子と様々な食品が売られおり、中にはフードコート的な飲食店街もあった。

よく考えたら、地上の通りにはレストラン以外の食料品店が無く、どうやらこの地下街に集約されている様だったが、お世辞にも清潔とは言えず、特に私には購買意欲に駆られることはなかった。

商店街全体を見ると、地元にお住まいの人達が普段の生活に必要なものを買い求める為にある商店街のひとつであるという感じなので、現地の人達の普段の生活を垣間見ることの出来る場所ということで一見の価値があったと思う。

■ 【所 感】 インドネシア

～ インドネシア料理について ～

船 木 孝 哲

広島ガス(株)

執行役員 総務部長

インドネシア料理は、マレーシアほど辛い香辛料は使用されずに、ココナッツミルク（現地では「サントラン」と呼ぶ）やサンバルと呼ばれる唐辛子ベースに塩、ニンニク、シャロットなどを加えた調味ソース、ケチャップマニス（甘い醤油）などが使われており、日本人にも受け入れやすい味付けになっている印象を覚えた。

インドネシアの代表的な料理（日本人に馴染みがあるだけかも知れないが）のナシゴレン（インドネシア風チャーハン）、ミーゴレン（インドネシア風焼きそば）には、前述のサンバルとケチャップマニスが使われており独特の食文化を形成していた。また、米種も水分が少なく細長いインディカ米が主流で、このお米がよく合うナシゴレンやナシチャンプル（混ぜご飯）、ナシドゥツ（ココナッツミルクで炊いたご飯）が多く供されていた。料理やその調理法はやはり現地で産出されるもので決まってくるものだなと妙に感心納得した。全般的にサンバルの香辛料系の味付けよりケチャップマニスの甘さが若干勝っている味付けで、サテ（肉の串焼き。日本風と言うと焼き鳥）にはケチャップマニスが多用されており、日本でタレよりは塩派の焼き鳥好きの私には残念かつ辛い味付けであっ



た。個人的にはケチャップマニス（ミーゴレン）に一番よく合うと思っており、最近流行の花椒や山椒系の混ぜ麺に飽き気味の方に受け入れられるのではとも考えている。

食材としては、人口の86%がイスラム教徒なので豚肉ではなく、鶏肉が好きな国民であるが、全体的には肉料理よりは豆腐や魚、エビと野菜を使った料理が多く、主食は米、そして調理法としては揚げ物が多い印象であった。その他、テンペ（tempe）と呼ばれ日本でもスーパーフードとして紹介されている大豆の発酵食品もあった。

インドネシアの食文化として見逃せないのが、朝から街角に多く並んでいる屋台文化である。屋台と言えば日本では夜のイメージが強いが、東南アジアでは朝からの屋台文化の国々が多く見受けられる。主に供されるものは、前述の米粉由来と思うが麺、サテ、揚げたバナナ、お粥などで、現地でカキリマ（kaki lima＝歩道幅を指す5フィートの意）と呼ばれているそうである。勿論、ミーゴレン、ナシゴレンもあったが、一番印象的だったのがかき氷の屋台で、インドネシアではあらゆる場所がかき氷を食す文化が浸透していた。いずれにしても、滞在中にいろいろ屋台を観て回ったが、衛生面や臭気などから買って食すまでの勇気がなかった。

現地に進出している日本人のソウルフード（とまでは言い過ぎかも知れないが）である牛丼の吉野家が偶然にも滞在のホテルの近隣にあるのを日中に見つけたので潜入捜査を試みた。入口に「Japanese style」と大きく書かれており、店内は非常に賑わっていた。メニューは普通の牛丼の他に、牛丼に鶏のから揚げや野菜がのったものもあった。勿論、小心者の私は普通の牛丼を頼んだ。しばらくして運ばれてきた牛丼は外見上では国内で食す牛丼と全く違いがなかった。そしていつものように細胞レベルまでルーティンになっている紅しょうがと七味唐辛子をトッピングして一口食べると、見た目同様あまりにも日本で食べる味と違いがないのに逆に驚く事になった。「現地風にしなくても受け入れられている」と妙に感心しながらお店を後にした。



最後に、触れておきたいのが、コンビニ文化である。勿論、日本国内で見受けられる光景と同様の品揃えであったが、印象的だったのが、肉まん、おにぎり、おでん、山崎製パンであった。勿論、現地のミーゴレンのインスタント食品などもあり、私も興味本位で買って帰ったが、日本の食文化がしっかりと現地の方に受け入れられているのに驚いた。また、暑い国でおでんが売られているのは違和感があった。試しに海苔おにぎりを購入して食してみたが、パサパサのインディカ米で塩味が薄いように感じたが、もう一つ買ったナシゴレンのおにぎりは絶品であった。

今回のインドネシア訪問で食文化を通じて感じたのは「この国でも生きてゆけるな」という印象であった。昨年、平昌オリンピックで韓国を訪れた際にも感じたが、前回より年数を経て訪問すると、味付けや衛生面などが受け入れ易くなってきている事である。ビジネスや観光で国際交流が進展して、現地の食文化も国際化が進み、訪れたビジネスマンや観光客にも受け入れ易くなってきているのである（その一方で現地らしさが失われているのかもしれないが）。



そう感じている私自身の舌の感覚も、日本の食文化も国際化が進んでおり日本らしさが失われてきているのだろう。それはそれで仕方がない事だと思いつつ、このような機会を頂いた関係者とお世話いただいた旅行会社、そして、楽しい行程をご一緒出来た団の皆さまに感謝いたします。

■ 【所 感】インドネシア

～ インドネシアの交通事情 ～

磯 部 順 司

(有)ライブワーク

代表取締役

インドネシアの首都であり、最大の都市であるジャカルタを訪問した。

世界一の都市圏東京に次ぐ世界2位の都市圏規模を持ち、今後通勤鉄道・地下鉄共に開業・延伸が期待され鉄道需要が伸びるのは間違いないであろう。

同国政府発表の統計データによると、ジャカルタの人口は2018年の時点で3200万、2010年の統計では980万人程度だったので、経済発展による中間層と呼べる人々の拡大が都市部への流入を促し、膨張を続けていることがうかがえる

1. 道路インフラ事情

(1) 渋滞について

- 他国の大都市同様に、深刻な交通事情に悩まされ、その様子から最大の都市であるジャカルタが『世界最悪』とも形容されるほどで、ジャカルタ特別州内の日中の平均時速は約25キロという記事を読んだことがあるが、まさにそのとおりと実感した。
- 日本と同じ左側通行であるが交差点が無いので右折ができない、道路が片側3車線、信号機の設置が少ない、運転マナーが悪い、故障車が多いなども渋滞の要因のようだ。
- 繁華街の近くでは、時間を問わず渋滞しており、オートバイすらもすり抜けられないことが珍しくない。
- 舗装状態も決して良好とはいえず、路肩には土や砂利が推積している。
- 大量輸送が可能な公共交通機関がまだ十分ではないということであろう。



(2) 交通事故状況

- インドネシア中央統計局 (Badan Pusat) の2012年発表によると、交通死亡事故発生数117,949件(うち死亡者は約30,000人)、WTOは「実際は4万人を超える」と推定している。
- 大半のドライバーは自動車保険未加入で、重大な障害のない限り基本的に当事者同士の示談による解決が通例となっているようである。

2. 公共交通機関

- 公共交通機関はバス（高速バス、大型路線バス、中型路線バス、小型離船バス）、鉄道（国有鉄道会社クレタ・アピによる運営）、地下鉄、タクシーなどがあるが、その中で日本と関わりの深い地下鉄を紹介する。

《地下鉄（インドネシア発のメトロ）MRTJ（フェーズ1）》

- 都市高速鉄道はジャカルタの中央都市軸から旧都市までの南北線建設計画が日本のJICAの支援で2019年3月24日運行開始した。

人口3200万人を超えるこの大都市圏に初の本格的都市交通で約2時間の通勤時間が25分に短縮され、定時運行率ほぼ100%、停電時も迅速対応、2019年10月現在、1日当たりの利用者数は9万人台、ジャカルタ市民の足として順調な運行を続けている。



ジャカルタ市民の足として定着した MRT 南北線（YouTube 画像より）

3. まとめ

今回の訪問で、世界最悪といわれるジャカルタの深刻な交通事情を目の当たりにした。

中心部は歩行者を想定外で街が作られたようで歩道がほとんどなく、あっても食べ物を売る屋台だったり、オートバイが走っていたりと、歩くことすらできないと感じた。

車の移動も歩く距離よりはるかに遅く5キロ行くのに1時間かかった。

まるで、日本の年末年始の帰省の渋滞が毎日起きているようである。

当地においてはMRTJが日本の支援で建設されたにも関わらず、セレモニーにおいて大統領の口から「日本」という単語は出なかったということで両国間での温度差を感じたが、今後は運行管理の面からMRTJを支えている日本人プロフェッショナルによるジャカルタにおける都市鉄道支援の行方を見守りたいと思う。

「3 in 1」時間（朝夕の通勤時間で特定の区間では、1台の自動車に3人以上乗っていないといけないというルール）になると「ジョッキー」と呼ばれる「3人目の乗務要員」の老若男女がどこからともなく現れ、乗用車にアピールしその区間のみ乗車して報酬を得ようとする。子供に「ジョッキー」をさせるため親が子供を学校に行かせなかったといった問題も深刻化しているようだ。

日本では人口減少であるが、2050年ごろにはジャカルタは世界最大人口の都市圏になっているといわれている。その頃までには鉄道インフラも大方整い、車両や鉄道技術もインドネシア国内で内製化されているであろう。そうした中でも日本がしっかり支援していることを期待したい。

■ 【所 感】 インドネシア

～ インドネシア雑感 ～

垣 見 直 樹

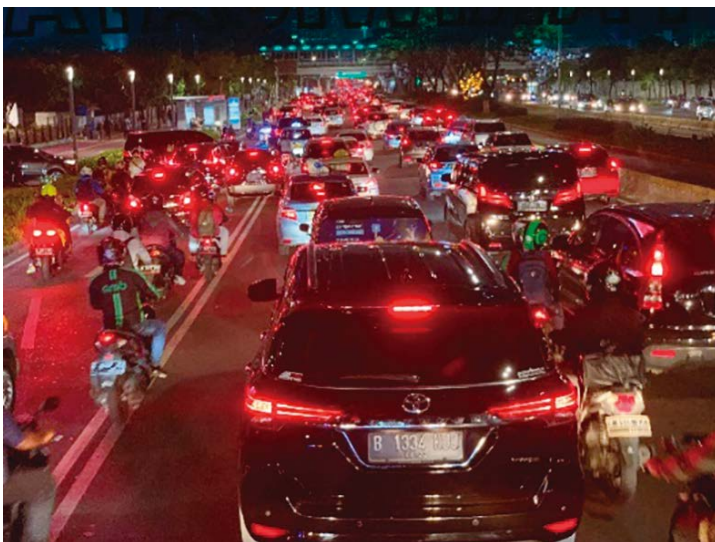
(株)コントレール
代表取締役社長

インドネシアは、これまで観光でも仕事でも立ち寄ったことがない国だった。イスラム過激派によるテロや鳥インフルエンザ、そして災害の脅威にさらされているという日本での報道によってマイナスイメージが先行していた。インドネシアのジャカルタと言えば大渋滞が有名で覚悟はしていたが、これほどまでに酷いとは思ってもみなかった。朝や夕方方は想像を絶するものがある。



宿泊先のホテルから在インドネシア大使館の大使公邸までの、たった2.5kmの距離をなんと約2時間もかかった。時速1km以下の殆ど停車状態である。夕方のラッシュ時とは言え、あまりにも酷い状態である。帰りは同じ道のりを10分で到着した。

経済成長に伴う人口集中もあり、現在のジャカルタは、自動車・二輪車の道路占有面積が道路の総面積を超え、交通がまひする「グリッドロック」に近い状態と聞いた。行政側は、マイカー通勤を減らすためにバス専用レーンを開業したが、バスの台数が足りず、乗客からは長く待たされた上に、ほとんど座れないという不満が多く、バス利用に切り替えようという動きは限定的なようである。最近



では、道路そのものを増やそうと高架道路の建設が開始されており、そのために渋滞がひどくなっている場所もあるとのこと。恒常的な渋滞は物流にも大きな支障を来していると思われる。いつまでも動かない車の中にと、ジャカルタは物流コストが高いということを実感する。こんな状況が日常茶飯事とは恐れ入る。早急のインフラ整備が必要である。それから空気が汚いと強く感じた。マレーシアに比べてもかなり汚染されている。こんな事から首都移転の話になるのだろう。

在インドネシア日本国大使館の石井大使のインドネシアの状況説明の中で気になったので、伊藤忠商事の駐在の田沼副社長に詳しく聞いて見た。

それは何かと言うと平均年齢の低さである。人口が2億6,000万人と日本の2倍もいるのに20歳近くも若いのである。カンボジアやベトナムでは内戦や戦争の影響で平均年齢が若いのは納得出来るがインドネシアではそんな戦争による人口減少はない。では何故低いのか。答えは生活習慣病にある。特に糖尿病患者が非常に多いそうだ。驚くことにインドネシアでは食べ物や飲み物がとにかく甘いことである。インドネシアでは炭水化物主義であることに加え、清涼飲料水や塩分糖分の過度な摂取により、高血圧や糖尿病などの慢性的な病に30代の人も多くかかっている。また、50歳代での突然死も多く、インドネシアの保健研究開発所は、国民の4人に1人が高血圧で、脳卒中や心臓病を発症する恐れが強まっていると警告しているそうだ。生活習慣病が死亡原因の上位を占めており、日本と同様に生活習慣病の治療だけではなく、生活習慣病の予防需要が高まっているそうだ。

そのことが最大の要因かどうか分からないが、今インドネシアの糖尿病患者数は急激に増えているそうだ。

インドネシアでは、人口の割には糖尿病患者が約855万人で世界7位というのは、少ないようだが、これは、糖尿病だと知らずに命を落とす人や国民保険制度が導入を開始して間がないために、なかなか病院に行って診断を受けて治療を受ける人がいないのが現状だそうだ。このことに関しては、個人的に非常に興味深いものがある。弊社で扱っている健康機器の大いなるマーケットになるからである。



インドネシアはキラキラの国と言われている。キラキラ（Kira Kira）とは、インドネシア語で「およそ、だいたい」という意味だそうだ。細かいことよりもゴールを目指すことの方が大切なものかもしれないが、インドネシアの方は、あまり細かいことにこだわらないようである。詳細さと正確さを求めがちな日本人は、戸惑うこともある。

また、集団を大切にし、思いやりの気持ちから、直接的に「No」と言わない傾向があるようで、こちらが誤解してしまうこともある。一方で、われわれに親しみやすいほほ笑みを見せてくれるありがたい方々である。習慣・文化・ビジネスのやり方も違い、寛容さ・忍耐が必要となるらしいが、我々の先輩方がそうであったように、ビジネスを通して両国の関係に少しでもお役に立てる交流が出来ればいいなと強く感じた。

■ 【所 感】 インドネシア

～ インドネシアの「首都移転」 ～

三 山 秀 昭

広島テレビ放送㈱

最高顧問

インドネシアという国が壮大な計画に挑んでいる。ジャカルタから首都を移転しようというのだ。なぜかこのテーマに興味を沸き、経済同友会の視察旅行に参加した。

ジョコ大統領は昨年、再選された。任期5年、3選はない。独立記念日の議会演説で、首都をジャカルタ（ジャワ島）からカリマンタン島（ボルネオ島）に移転する構想を公表した。「ジャカルタは政治、経済の負荷がかかり過ぎている」と一極集中の弊害を理由に挙げ、「移転先は戦略的な場所で、インドネシアの国土の中心にあり、地震など災害リスクも最小だ」と訴えた。

インドネシアという国は知っているようで知らない点が多い。国土は東西5100キロに及ぶ。「米国の東海岸から西海岸よりも長い」と知る日本人は少ない。国内でも時差が2時間。人口は中国、インド、アメリカに次いで2億6千万人。年間500万人増えており、「毎年インドネシア国内にシンガポールが生まれている」という。問題は人口集中度だ。一万数千個の島からなる国だが、首都ジャカルタがあるジャワ島に人口の60%が集中している。ジャカルタの人口は1000万人、「ジャカルタ首都圏」では3000万人で、ほぼ東京と同じだ。

ジャカルタは「世界で最も交通渋滞が激しい街」と酷評される。それはカイロやバンコクの比ではない。幹線道路は車がひしめき合い、ほとんど動かないこともしばしば。数珠繋ぎの車の隙間をバイクが縫うようにうごめき、排ガスによる大気汚染是北京並みだ。日本大使公邸でのミーティングに出向くのに「30分はかかるでしょう」と言われたが、「念のため1時間前」にホテルを出た。到着したのは何と1時間40分後。大使館員に大幅遅刻を詫言ると「こちらでは遅刻の言い訳は不要です。日常茶飯事ですから」。商工会議所への表敬訪問は炎暑の中、20分ほど歩いて出かけた。「最も正確な交通手段」は歩きだ。



もちろん、専用のバスレーンや平日朝夕の都心への車の乗り入れ規制（奇数日はナンバーが奇数の車のみ通行できる）など方策は講じられてはいる。しかし、全くの焼け石に水。公共交通機関が圧倒的に少ないのが最大の原因だが、超過密になってしまっただけでは「道路一本作るのも至難の業」（地元メディア）だ。「交通渋滞による経済損失は年間100兆ルピア（7500億円）」というから常識を超えたすさまじさだ。

交通渋滞のほか、地下水のくみ上げによる地盤沈下も激しく、「ジャカルタの半分近くは海拔ゼロメートル地帯」だ。さらには頻発する地震災害や「ジャカルタと他の島との経済格差は10倍以上」という事情もあって、これらが「首都移転」の背景にある。

インドネシア政府が発表した首都移転の概要は次のとおり。①新首都はジャカルタの4倍の25万6000haと広大で、すでに18万haの国有地を確保②2021年に着工、24年に政府や議会の移転開始③経済機能はジャカルタに残す④独立100年の45年までに完成⑤移転費用は概算466兆ルピア（3兆5千億

円) ……などだ。問題は財源で、外国からの投資も受け入れる。ソフトバンクグループの孫正義会長は2020年1月にジョコ大統領と会談、人工知能(AI)を活用したスマートシティとしての新首都建設への投資を表明した。

日本でもかつて首都移転が重要課題になったことがある。法律も制定され、20年前には「栃木・福島」「岐阜・愛知」「三重・畿央」の三か所が候補地に選定されるところまで進んだが、いつの間にか立ち消えになり、今では忘れ去られたテーマとなっている。

「マグニチュード7の首都直下型巨大地震の発生率は30年以内に70%」と言われてもう2年が経過、それは今年かも知れないのだ。「最悪2万3000人が死亡」と予測される東京。ジャカルタと東京を同列視はできないが、「一極集中」の弊害では同じ。「インドネシアの挑戦」に学ぶヒントはないものか。

■ 【所 感】 インドネシア

～ インドネシアの視察を振り返って ～

加 藤 雅 規

(株)加藤組

取締役副社長

マレーシアの視察を終えてクアラルンプール空港を飛び立つと、間もなく眼下にスマトラ島が見えてきた。快晴の中、島一面に雲が湧き上がっている。広大なジャングルと曲がりくねった川が大量の濁流を島の沿岸へ運んでいるの見える。「これが地球の肺、熱帯雨林の呼吸か」と思った。

まもなくジャカルタ上空に入ると空がどんよりと霞んでいる、まもなくその原因を体験することになる。

スカルノ・ハッタ国際空港からバスでジャカルタ市内の一般道へ降りた途端、凄まじい渋滞に会った。自動車の車間は極端に狭く、バイクがぎっしり詰まってすり抜けていく。

昼食後ホテルへチェックインし、ジャカルタ商工会議所へ向かう。その距離数100mであるがバスでは渋滞で更に遅れるということで歩いて向かうこととなった。自動車の排ガスがインドネシアの環境問題を深刻にし、首都の移転まで議論に上がっているようだ。

ジャカルタ商工会議所では、トヨタ、ヤマハをはじめ多くの日本企業が進出していることや技術者育成のため工科大学と広島大学の共同研究・ワークショップが行われている事を知った。

また、インドネシアでは多くの女性が活躍しており、それには男性のサポートが欠かせないこと、当方からは環境問題でお手伝いできないか？など活発な意見交換が行われた。

夕食では、ジャカルタジャパンプラブとの交流が行われ、広島発祥企業の現地駐在員の方や元広島大学留学生との親睦を図ることができた。中でも現地で起業して活躍している元留学生が多いことに驚いた。

次の日訪れたカラワン工業団地は、伊藤忠商事(株)と地元企業が共同で開発し、ISO9000(品質)・14000(環境)を取得して、「本業に専念できる工業団地」をモットーに運営されている。広大な敷地は千代田区と同程度で約140社が工場を構え、その内85%は日本企業である。



夜の表敬訪問の前にホテル周辺を散歩してみた。ジャカルタは熱帯に位置し一年中夏であるが、日本の夏のような暑さではなく半袖で歩けば結構快適である。



ホテル周辺には、オーストラリア・イギリスなどの大使館があり、ヤシ並木の通りに一戸建ての豪邸が並ぶ。また、一角には屋台が軒をつらねる雑踏もある。10,000ルピア（約80円）のタイ・ティーがとても美味しかった。

駐インドネシア共和国特命全権大使の石井正文様を表敬訪問し、インドネシアは人口が大変多いにもかかわらず平均年齢が30歳と非常に若いこと、多くの経済協力プロジェクトが進行中であることを教わった。逆に日本の平均年齢が47歳と聞いて自分もかなり平均を過ぎていることを改めて知らされた。



朝食後の散歩中、大音量に惹かれて広場を覗いてみると20人ほどの女性たちに混ざって数人の男性もエアロビクスで体を動かしていた。近づく笑顔で誘ってくれたので2曲ほど一緒に楽しみ、良い汗をかくことができた。

国営エネルギー企業であるプルタミナは、天然ガス・石油の開発から輸出、発電事業を総合的に手掛けている企業であり、広島へも長年にわたって天然ガスを輸出している。

直接交渉へ関わってこられた広島ガス㈱の田村会長のお話を聞き、天然ガスを安定して供給できることのむずかしさを感じた。

最後に訪れたパサール・バル市場はジャカルタ庶民の台所といった感じで、そこに並ぶ食材は見慣れたものも多い。

インドネシアでは、活気あふれる経済成長と多くの日本人がそれに関わっていることが印象的であった。私にとって今回の視察は、マレーシア・インドネシアという国を垣間見て、日本とのつながりを実感する大変有意義なものとなった。

終わりに、視察団の皆様と旅行中大変にお世話になったひろでん中国新聞旅行の前田様へお礼を申し上げます。



■ 【所 感】 マレーシア・インドネシア

～ マレーシア・インドネシア経済視察 雑感 ～

佐 藤 卓 己

(株)サンエス

代表取締役社長

11月25日に本隊より一日遅れでクアラルンプールに入った。その前にベトナム・タイへ仕事で5日間立ち寄り、身体を南方気候に合わせた上での合流だった。

マレーシアへは、30年前ペナンの東レ工場訪問、10年前にジョホールバルのシャープ工場訪問と二度訪ねているが、クアラルンプールへは初めての訪問で、興味津々で空港に降り立った。最近マハティール首相に代わり、以前の親中政策から転換が進んでいるのかと思いきや、空港から市内に入ると道路やビルの建設ラッシュの中で、相変わらず中国企業らしき重機やトラックが目に入った。また前政権の消費税制度を撤廃し、新たな税制に変更した影響がすぐに表れたのか、ショッピングを楽しむ市民が溢れ、近代的なショッピングセンターを中心に活気に満ち溢れていた。

在マレーシア日本国大使館の岡大使は松山の出身で、大変親しみのある方でアラブスクール出身の方。

27日は、クアラルンプールからバスで2時間以上南のマラッカ海峡沿いの「ジマイーストパワー」超超臨界圧石炭火力発電所に訪問。中国電力さんの出資・技術協力の工場で、日本の基準と違うマレーシア基準で作られており、色々日本では出来ないことが出来るようだ。折しもマドリードではCOP25が開催され、地球温暖化対策が叫ばれる中、黙々と白煙を上げる煙突が、世界各国の対立を物語っている。

午後はクアラルンプールのランドマーク「ペトロナス・ツインタワー」訪問。地上452メートル、88階建てのツインタワーは、日本のハザマと韓国のサムスンが共同建設したもの。どちらかが傾いたので、真ん中の階に橋渡しして傾きを補正したと言われている。最上階の展望フロアーからは、市街が一望でき、USPGAの公式ツアー競技が開催されるTPCクアラルンプールゴルフ場が目の前に。



27日はジャカルタへ移動。ジャカルタへは5年ぶり。繊維関係の日系工場が多数あり、またシャープ半導体工場もあるので、2～3年に一度は訪問していた、が、空港に降り立つとまるで近未来の空港の様子。あまりにも大きい空港で、人は疎らにしか見えない。以前の赤レンガ平屋造りで人が溢れかえっていたジャカルタ空港は何処に。

小遣い稼ぎをしていた小役人の姿もない。チップを払えば少々のお酒の持ち込みも見逃してくれた税関員もない。大変な違和感を覚えながらバスで市内に。そこには相も変わらない交通渋滞地獄の姿が出現し、懐かしさで少しほっとした。

夜は日系企業駐在員が中心のジャカルタジャパンプラブの皆様や、広大留学卒業生の皆さんと交流会。日本料理に舌鼓を打ち、たらふくお酒もいただいた。

28日はカラワン工業団地を視察。伊藤忠さんの合弁事業で、多くの日系工場が集積していた。この

地にシャープ半導体工場があり、5年前まで足しげく訪問していたが、今は日本人駐在員ゼロで、インドネシア人の社長となっていると聞き驚いた。

これだけ広大な工業団地も一杯になり、現在新規団地を造成中と。イスラム教中心主義政党が台頭する不安定な政治状況の国だが、まだまだ日本からの投資の魅力が有るようだ。

夜は在インドネシア日本国大使公邸で、広島出身の石井大使の歓迎を受けた。石井大使は谷口事務局長と広島学院の同級生とのことで、大変愉快的な時間を一緒に過ごした。

29日はプルタミナ社訪問後市内の古い商店街を視察。クアラルンプールの近代的ショッピングモールに比較し、ジャカルタは混雑としたままだ。人口が多すぎて地下水の取水過多で地盤沈下が進み、交通渋滞も地下鉄開通程度では改善されず、首都移転が現実的になる中、あまり都市再開発計画も考えづらいのかと思えた。

この度は視察団の皆様と楽しく、愉快地に過ごさせていただき、誠にありがとうございました。お世話いただいた佐々木団長、田村副団長、山本副団長に感謝申し上げます。



■ 【所 感】 マレーシア・インドネシア

～ マレーシア、インドネシアにおけるイスラム教の感想 ～

丸 川 眞 佳

(株)アートテレビ
代表取締役

今回の経済視察で最も調べかったのがイスラム教の「ハラール」についてであった。

最近、私の住む福山でも「ヒジャブ」を被った若い女性が集団で歩いたり買い物をしている姿を良く見かける様になった。彼女らはインバウンドではなくマレーシアやインドネシアから来た看護実習生であるという。当社で料理番組を制作している関係で彼女らの食事に興味を持ったのだが言葉の関係でまだ取材の途中であった。



そんな関係で、マレーシア、インドネシアの経済視察では市民の日常の食事に興味があった。

ところが現地に着き最初の訪問企業のオタフクソースマレーシア社でマレーシアの食事事情や「ハ

ルール」について話を聞いている内にイスラム教に対する知識不足もあり日本で描いていたこの国の生活のイメージが根底から覆えさせられた。

マレーシアは人口約3,200万人の内65%がイスラム教を信仰し国の宗教である。

このイスラム教徒に義務化されている「ハラール認証制度」は1970年頃マレーシアで始まったと言われイスラム教徒の信仰の告白、礼拝、喜捨、断食、聖地メッカへの巡礼など宗教と食品科学両面から「ハラール」である事を保証する制度が生まれている。

オタフクソースでは多くの試行錯誤の末「ハラール認証」を取得したとの説明があった。

ハラールの定義、ハラール食品とは、シャリーア法に則り、ハラール洗浄、礼拝場所の設置、礼拝時に必要な備品の設置など日本では想像もつかない問題を一つ一つ解決し獲得したうえで、取得後も従業員の教育や組織としてのマネジメント体制も必要で、すべて気が抜けないという制度だがこれからの企業戦略に大いにプラスになるはずだと期待を掛けていた。

現在、オタフク社ではマレーシアで130店舗展開する「Sushiking」、34店舗の「Aeon Malaysia」での販売、自社による家庭用お好みソースの販売、シンガポールなど近隣国への本格的輸出などイスラム教の「ハラール認証」は大きな武器になっているように感じた。市内の店舗でも辛さの違いはあるが日本でお馴染みのお好み焼きやお好みソースを見かけ愛着を感じた。

次の視察地インドネシアは人口約2億6千万人の内90%がイスラム教の国で多くの宗教施設を見かけた。巨大なムスク、あちこちのドライブインで見かける礼拝所、そこには多くのイスラム教徒（ムスリム）が礼拝を行っていて宗教の強さを感じさせられた。ただ市街地での女性のヒジャブを被っている人数はマレーシアより少ないように見えたがこれは両国の風習の違いによるものでイスラム教を信仰する厳格さは変わらないとの事であった。

イスラム教は世界で16億人その内8分の1近くがインドネシア、マレーシア人と言われ、両国は経済発展も素晴らしく日本へのインバウンドも伸び続けている。統計によると世界からの訪日ムスリムは35万人、ハラール市場は125億円、在日ムスリムは10万人、在日ハラール市場は540億円と日本にとって大きな魅力的なビジネス市場に育っている。

今回の経済視察で感じたことはこのビジネスチャンスを活かすためには、インバウンドや外国人労働者の受け入れなど対象国の宗教や文化を体験したり、充分理解する必要があることを実感した次第で、これから外国人労働者用のeラーニング教材、放送番組などに生かす予定である。



■ 【所 感】マレーシア・インドネシア

～ イスラム文化圏で感じたこと ～

山 根 近

久福汽船(株)
代表取締役

「大きく変わったな」と思うところと、「全く変わってない！」と思うところの両面が肌身で感じられた今回の視察であった。

例えばゴミが（あまり）落ちていない、物乞いを見ない、高層ビルが乱立している、車がきれいになった等の経済発展により変わったところ。昔日に仰ぎ見たペトロナスツインタワーもいまや数多ある高層ビルの一つに過ぎない。

相変わらずのジャカルタの交通渋滞、裏道や郊外に入った際の市井の人々の生活等は変わっていないところ。大使公邸での食事会に、予定の1時間前に出発しながら30分遅れて到着したにも関わらず温かく迎えていただけたのは、大使の度量と現地に住む人々の肌感覚なのであろう。

もう一点書いておかねばならないのは、クアラルンプール（KL）とジャカルタ（JKT）の差異である。外から見ていると同じようにしか

見えていなかったKLとJKTには決定的な差がついていると感じた。1人あたりGDPがUS\$1万ドルを越えたと言われるマレーシアは、政治的な問題は分らないが、順調に経済発展の歩みを続けているように見えた。同国は現在もそして将来に渡っても、発展していく世界のイスラム教国と西側諸国との結線点として益々重要な地位を占めていく事になるであろう。

それに対してインドネシアは、交通インフラの不足から全ての発展や成長が阻害されている様に見えた。（計画のひとりあたりGDPもUS\$4千ドルに到達できず）

同国を代表する石油公社であるプルトミナを訪れたが、人口増加により既に石油の純輸入国になっており、資金力不足からかオイル・ガスの生産量も新規開発計画も頭打ちになっている。僅か人口の4%に過ぎない華僑が経済の80%を握っていると言われており、その資金力が国の発展につながっていない。国家として決定的に資金力が不足し、インフラに投資する余力もない為に交通障害が蔓延する悪循環に陥っている

インドネシアの悪い面ばかりを述べたが、一方では世界に冠たる観光大国であり、バリ島には東京の倍以上の五つ星のホテルがあるそうだ。このようなナチュラルリソースを活かして、全体としてマネジメントが取れば、ASEANを代表する大国となる可能性を持っている。いずれにせよ、子供たちの教育とインフラ整備が今後この国を発展させる大きなカギとなるであろう。

私の所感のミッションが、「イスラム文化圏で感じたこと」とのお題ですので、その部分に少しフォー



カスしてみたい。

先ず大前提として理解しなくてはいけないのは、マレーシア、インドネシアの両国は共に非常に“ゆるい”イスラム教国家（文化圏）であるという前提であろう。

ガイドからの紹介もあったが、KLなどはシーズンになるとオイルマネーを持った中東のお金持ちが大挙してバケーションにやってくる。大きなイスラムの戒律の中で（お祈り・食事・生活等）一定程度羽が伸ばせるのでイスラム教徒ツーリストの天国となっている。

イスラム教の教えに従って処理された証であるハラール認証が、肉類・調味料・食材にも付いている、お祈りの場所にも困らない、イスラム教徒観光客は安心して楽しめるわけだ。

視察中、我々は昼食・夕食を問わずにアルコールを楽しめたが、イスラム戒律の厳しい都市を訪問すると、ホテルでこそこそと楽しむのが関の山となる。

いくら“ゆるい”国とは言ってもムスリム国家なので、そこは郷に入れば郷に従えという言葉の通り、現地資本の会社に視察に行く前には、節度ある飲酒などの配慮も必要と思われる。

旅行中に街のいたるところにモスクがあり、ある一定程度ヒジャブを被っている女性を見かけるなど分かり易いイスラム社会を感じる場面はあったが、それ等はイスラム文化の僅かな一面でしかない。

過去、弊社で新造船舶を中東のオペレーターと長期傭船契約を結んだ経験がある。

ちょうど運悪く、契約締結後から船舶が竣工するまでの間にリーマンショックが発生し、マーケットが暴落した影響で、相手の会社から「このままでは傭船契約が履行できないので、何とかキャンセルしてほしい」と何とも理不尽なお願いをされた。



通常の相手であれば訴訟を起こして正面から戦う場面であるが、関係各位と協議を重ねた結果『可能な限りの弁済を貰って、傭船契約を解除する』という結果を受け入れざるを得なかった。

その結果を受け入れに際して、そのトリガーとなったのが

- ① 相手はイスラムの法律に則った会社であるという事
- ② その会社のパートナーが、インドの財閥の会社であるという事
- ③ 全てを“Bismillahアラーの名のもとに”で締めようとする事 の3点であった。

勿論、正解が何だったのかは判らないが、イスラムの法律、金融、習慣など普段我々が接しているのとは異なる世界と渡り合っていくためには、まだまだ勉強と経験をしていかなくてはならない点が多くあるという事だけは確かなようだ。

クアラルンプールを訪れたのは15年ほど前、ジャカルタに至っては30年ほど前になり、あまりにも古い経験との比較にはなるが、伸び行くASEANを代表する両都市をゆっくりと視察・観察できる良い機会となった。

視察を通じて見えてきた日本と両国の関係 ～経済発展を支えてきた日本政府・企業の関り～

大 内 康 隆

オタフクホールディングス(株)

執行役員 広報部 部長

日本との関係として、マレーシアは1957年、インドネシアとは1958年の国交樹立から始まっており、両国とも戦後に独立した国ということを考えると約60年と比較的短いといえる。ただ、この間日本は両国に対し、政府開発援助（ODA）として長期低利の政府貸付で、大規模インフラ整備や、技術協力として経済・社会・環境・インフラ整備など幅広い分野で人材の支援を行ってきた。こういった半世紀以上の取り組みもあり、日本に対する評価は高く、現在マレーシアで約1,400社、インドネシアで約1,600社の日系企業が進出できていることに繋がっていると考えている。

日本に対する評価は、インドネシアで貿易・製造業・サービス業関連を取り扱い、民営のための利益代表として発言をする「インドネシア商工会議所（KADIN）」を訪問した際に、これまでの日本の協力を評価するとともに、今回訪問した広島経済同友会メンバーがどうインドネシアに貢献してくれるのかなど、具体的な話があがっており、彼らにとっても日本が重要な協力先であることが伝わった。



KADIN での様子

この視察を通じ、両国へ進出している日本企業の多さと影響力を目の当たりにした。一番はやはり自動車・二輪車における日本車の占有率だ。特にインドネシアでは日本車以外を目にする方が難しい状況だった。これは帰国後の中国新聞（12月21日掲載）での情報となるが、60年代にインドネシア政府が日本車の輸入を望んでおり、その先駆けとして委託生産を行ったのがマツダだったと記事にあった。その後トヨタ・ダイハツなどの各メーカーが現地での生産に乗り出したという背景があるようだ。また、食品スーパーとしても千葉県に本社を構えるイオン(株)が両国で大規模な店舗を展開されていた。こちらはマレーシアの例になるが、80年代にマハティール首相（当時）からマレーシア流通の近代化に貢献してほしいという要望があり、それに応えた形で1984年にジャヤジャスコストアーズが設立され、その後の多店舗展開に繋がっている。この2つの事例は政府が日本企業に対して要請し、それに対応をした点が共通している。日本企業の進出により、自国の産業が発達し、インフラ整備が進み、また雇用も生み出すといったWin-Winの関係がこれまでマレーシア・インドネシアで形成されてきたといえる。

これからの関係について、20～30年後にはインド・中国を中心に、アジアが世界経済の中心となると言われている。インドネシアも2040年にはGDPが日本を上回る予測で、今の日本が援助する関係がそのまま維持されるかは不透明だが、両国ともインフラ整備や都市機能の再構築は急務といえ、日本企業のもつ技術は少なくとも数十年は必要とされるのではないかと考える。また、日本国内での消費力が低下していくなかで、日本との関係が良好で、今後も成長が予想される両国に向けた商品やサービスの提供に注力していく日本企業は更に多くなってくる。これも日本政府・企業が両国の経済発展、友好関係に向け貢献をしてきた成果であり、今日までの関係が活かされ、更に拡大していくことを望んでやまない。そういった思いを新たにしたら、非常に有意義な経済視察であった。

❧ お わ り に ❧

広島経済同友会

マレーシア・インドネシア経済視察団

副団長 山 本 慶一郎

(株)中国新聞社 社主兼取締役)

今回の東南アジア経済視察では、私も含めて多くの団員がその経済成長のスピードに度肝を抜かれたと思う。シンガポールに続く先進国入りを見据えるマレーシアと、2億6千万人もの人口を抱えて大国の風格をまとうインドネシア。東南アジア諸国連合（ASEAN）の中核として大きな発展を遂げた両国だが、成長の足元では日本企業がインフラや雇用でまだまだ大きな役割を担っており、結びつきの深さを再認識した。

マレーシアの首都クアラルンプールは、どこもかしこも高層ビルの建設ラッシュで沸いていた。街は夜中でも明るく、工事現場ではゼネコンの看板が、誇らしげにライトで照らし出されていた。広島ガスが天然ガスの調達先として、長年にわたり深いつながりを有している国営石油ペトロナスの本社があり、1998年に完成した88階建てのツインタワーは、今でも首都のランドマークだ。街中も活気にあふれ、歩く人々の表情もどこか明るい。

そのクアラルンプールから車で約1時間半の距離にあるジマイーストパワー。白く巨大な煙突が目进行くこの石炭火力発電所は中国電力と三井物産が間接的に出資しており、8月に初号機が動き出したばかりだ。対応にあたった担当者によると「国内の電力需要の約10%を賄っている」という。再生可能エネルギーの拡大も重要課題だが、この国では大規模な発電施設がまだ不足しており、中国電力が持つ「超超臨界圧方式」という発電効率を高める技術が、電力の安定供給に大きな役割を果たしていた。

インドネシアに移動した5日目には、首都ジャカルタから東に約60キロメートルほど離れた場所にあるカラワン工業団地を訪れた。総開発面積が約1370ヘクタールにも及ぶ団地は伊藤忠商事が1993年から開発を進めており、高圧電力や排水プラントなどのインフラ網に加えて、住宅や学校、サッカー場まで備えたひとつの街が広がる。約160社にのぼる進出企業のうち8割が日本企業で、自動車や二輪車関連の企業が多い。若者失業率が高い同国で人気の勤務地の1つで、賃金相場も「周辺相場と比べて高い」という。

東南アジアの高い経済成長が注目されて久しい。しかし、日本企業の協力をなお強く必要としていることを印象付けられたのが、インドネシア商工会議所での出来事だ。表敬訪問のつもりでいたが、相手方は大会議室にずらりと20人近い関係メンバーを揃えて我々を出迎えてくれ、その関心の高さに身震いがした。視察団企業のことも調べてくれており、同会議所幹部からも「水処理や物流面で私たちとのパートナー企業になれないか」と、企業名を名指ししてお声をかけて頂いた。市民生活の向上に広島に住む我々が力を貸すことが出来る仕事がある、東南アジアにはまだまだ多くある。

マレーシアではオタフクソースが地元企業と合併で現地法人を設立し、2016年に本生産を開始。イスラム圏への進出拡大をにらんでハラール認証を受け、生産したソースで作ったお好み焼きは、現地スーパーの総菜として人気で、3年目となる18年には黒字化を達成した。進出するのに遅すぎることとはなく、あらゆる分野でチャンスは残されている。

当同友会の本年度のテーマは「広島という価値を眠らせない」だが、広島が海外において東京と並ぶ知名度を持つことは、私自身の海外生活でも身をもって体感している事実だ。今回の視察が、会員企業が「ヒロシマ」の知名度を生かして、海外で様々なことにチャレンジする契機となればと思っている。

最後に、国際委員長としても団員としても初の視察であり、至らない点も多くあった点をお詫びしたい。帰国後も反省しきりだが、7日間を大きなトラブルなく乗り切れたことを嬉しく思う。ご協力いただいた関係各社や現地子会社の皆様に、あらためて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

視察写真集

～ インドネシア ～



インドネシア商工会議所とのミーティング



ジャカルタジャパンクラブとの交流会



カラワン工業団地視察風景



駐インドネシア石井特命全権大使によるレクチャー



プルタミナとの面談



バサール・バル